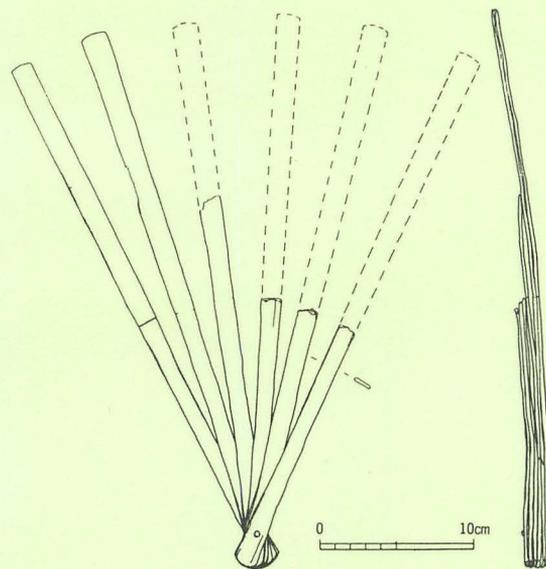


寺家遺跡

— 県営ほ場整備事業羽咋西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —



1997

石川県立埋蔵文化財センター

寺家遺跡

1997

石川県立埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は、県営は場整備事業羽咋西部地区に係る寺家遺跡発掘調査報告書である。調査地は、石川県羽咋市柳田地内に所在する。
- 2 調査は、石川県農林水産部農地整備課、羽咋農林総合事務所（当時は耕地整備課、羽咋土地改良事務所）の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。費用は同課が負担したほか、一部文化庁の補助金による。
- 3 発掘調査は平成5年5月6日から同年5月28日まで、中島俊一（石川県立埋蔵文化財センター調査第一課長）の指導を受け、本田秀生（同主事、現同主任主事）、土屋宜雄（同主事、現在(社)石川県埋蔵文化財保存協会）が担当して行った。また、大藤雅男（同センター 調査補助員）が調査を補助した。発掘調査面積は200㎡である。
- 4 出土品整理は、遺物の洗浄を平成5年度に(社)石川県埋蔵文化財保存協会に委託した他は、平成5年度に土屋と土屋の指導のもとで竹村八千代、得野亜紀が担当した。
- 5 本書の編集は本田、土屋が行い、これを山本澄美子、池村ひとみが補佐した。執筆は第1章、第2章、第3章第1節2～4を本田が、第3章第1節1、第3章第2節、第5章を土屋が執筆した。第4章は金沢大学教養部鈴木三男氏（現在東北大学理学部）・西尾典子氏、農水省森林総合研究所能城修一氏にお願いし、玉稿を賜った。また、付章として栃木英道（石川県立埋蔵文化財センター主事、現同主査）による寺家遺跡昭和60（1985）年度発掘調査報告を掲載した。
- 6 発掘調査および出土品整理・報告書作成に当たっては、次の諸機関の方々から御指導、御協力をいただいた。県農林水産部、羽咋農林総合事務所、羽咋西部地区柳田工区の関係各位、金沢市教育委員会、羽咋市教育委員会、小松市教育委員会、(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 7 本調査に関する出土品、記録資料などは石川県立埋蔵文化財センターが一括して保存している。

目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 遺跡の位置と環境	1
第2節 周辺の遺跡	1
第2章 調査に至る経緯と経過	7
第1節 調査に至る経緯	7
第2節 調査経過	7
第3章 遺構と遺物	10
第1節 遺構	10
1 土層の対応関係について	10
2 A区の遺構	10
3 B区、B区東方試掘坑の遺構	10
4 C区の遺構	16
第2節 遺物	17
1 A区出土遺物	17
2 B区、B区東方試掘坑出土遺物	17
3 C区出土遺物	28
4 主要出土土器の時期について	29
5 出土木製品について	30
第4章 寺家遺跡出土木製品の樹種	35
第5章 まとめ	40
付章 寺家遺跡昭和60（1985）年度発掘調査報告	42

挿図目次

第1図	羽咋市位置図	1
第2図	寺家遺跡と周辺の遺跡(S=1/2500)	2
第3図	寺家遺跡調査区位置図(S=1/3500)	5・6
第4図	調査区の配置と周辺の地形(S=1/3000)	9
第5図	調査区と主な出土遺物(S=1/3000)	11
第6図	A区遺構平面図(S=1/250)	12
第7図	A区土層断面図(S=1/60)	12
第8図	B区・B区東方試掘坑平面図(S=1/250)・土層断面図(S=1/60)	13
第9図	C区遺構平面図(S=1/250)	14
第10図	C区土層断面図(S=1/60)	14
第11図	A-2・3区遺構平面図(S=1/60)	15
第12図	A-3・4区遺構平面図(S=1/60)	15
第13図	B-1・2号溝平面図(S=1/60)	15
第14図	C区1・2・4号溝平面図(S=1/60)	16
第15図	C区3号溝平面図(S=1/30)	16
第16図	A区出土遺物1(S=1/3)	18
第17図	A区出土遺物2(S=1/3)	19
第18図	B区出土遺物1(B区1号溝)(S=1/3)	20
第19図	B区出土遺物2(B区1号溝)(S=1/3)	21
第20図	B区出土遺物3(B区2号溝)(S=1/3)	21
第21図	B区出土遺物4(S=1/3・原寸)	22
第22図	B区B方試掘坑出土遺物1(試掘坑No.1)(S=1/3・1/6)	23
第23図	B区東方試掘坑出土遺物2(S=1/3)	24
第24図	C区出土遺物1(C区1号溝)(S=1/3)	25
第25図	C区出土遺物2(C区3号溝)(S=1/3・1/6)	26
第26図	C区出土遺物3(S=1/3)	27
第27図	昭和60年度調査区(S=1/1000)遺構(S=1/80)・遺物(S=1/3)	43

表目次

第1表	遺跡地名表	2
第2表	寺家遺跡の調査経過	5・6
第3表	出土木製品分類表	33
第4表	出土木製品計測表	34
第5表	羽咋市寺家遺跡出土木製品の樹種	39

図版目次

図版1上	A区表土除去作業(北から)
図版1中	A区作業風景(東から)
図版1下	A-2区不明落ち込み完掘状況(南から)
図版2上	A-2区不明落ち込み扇出土状況(北西から)
図版2中	A-3区完掘状況(西から)
図版2下	A-3区より以南完掘状況(北から)
図版3上	B区作業風景(南から)
図版3中	B-1区1号溝遺物出土状況(北から)
図版3下	B-3区2号溝完掘状況(東から)
図版4上	B-3区2号溝人形出土状況(西から)
図版4中	B区完掘状況(北から)
図版4下	B-4区完掘状況(北から)
図版5上	東方試掘坑No.1遺物出土状況(東から)
図版5中	東方試掘坑No.2遺物出土状況(南東から)
図版5下	東方試掘坑No.3完掘状況(南から)
図版6上	東方試掘坑No.4完掘状況(東から)
図版6中	東方試掘坑No.5皿出土状況(南から)
図版6下	東方試掘坑No.6完掘状況(北東から)
図版7上	C-区表土除去作業(北から)
図版7中	C-3区1、2号溝完掘状況(東から)
図版7下	C-1区畦状遺構(東から)
図版8上	C-3区3号溝遺物出土状況(南から)
図版8中	C-3区3号溝完掘状況(東から)
図版8下	C区完掘状況(北から)
図版9	A区出土遺物
図版10	B区出土遺物(B区1号溝)
図版11	B区出土遺物(B区2号溝・その他)
図版12	B区東方試掘坑出土遺物
図版13	C区出土遺物1(C区1・3号溝)
図版14	C区出土遺物2
図版15上	昭和60年度調査区
図版15下	昭和60年度調査区排水作業
図版16上	昭和60年度調査区東側完掘状況
図版16下	昭和60年度調査区出土遺物

写真目次

写真1	出土木製品切片の顕微鏡写真1	37
写真2	出土木製品切片の顕微鏡写真2	38

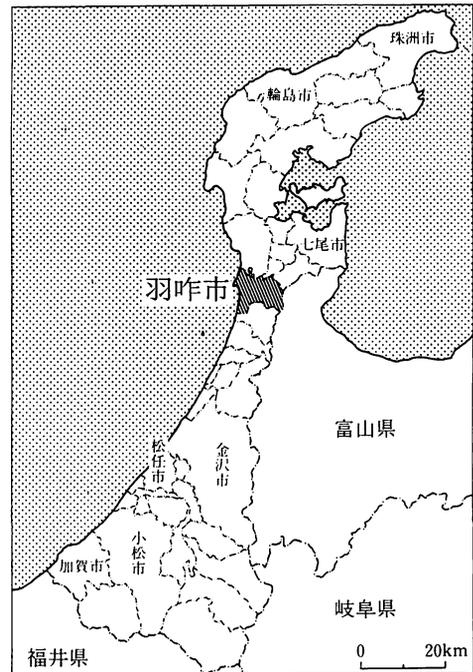
第1章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境（第1・3図）

今回報告する寺家遺跡は、石川県羽咋市に所在する。羽咋市は石川県の中央部北よりに位置し、金沢市街地からは車で約1時間程度である。地形的にみると日本海に突き出す能登半島の基部西側に位置し、北東部の眉丈山丘陵地と南東部の石動山系の山地に挟まれた邑知地溝帯と、この地溝帯を閉じるように延びる羽咋砂丘が市域の主体となる。

地溝帯にはかつて周囲14.5km、最深部14.3m、水面面積465haの邑知潟が広がっていたが、昭和23年から同43年にかけて実施された国営干拓建設事業で、現在は遊水池に姿を変えている。この邑知潟には長曾川、飯山川、吉崎川などが流れ込み、同潟から羽咋川となり南西へ流れ日本海へ注いでいる。古来からその地理的位置により交通の要所となっていたが、現在でも金沢方面から七尾方面へ抜ける国道156号線が市域の東部を、輪島、珠洲方面に向かう国道249号線及び能登有料道路が市域の西部を抜けている。この能登有料道路建設の際に発掘調査が

行われた寺家遺跡は、その豊富な遺物から渚の正倉院と称せられた。産業は農業が主体で、また、近世以来の能登上布の系譜を引く繊維工業も盛んである。今回の調査地は旧邑知潟の北西端に位置する柳田町にあり、その町域の南西端の猫の目地内で、寺家遺跡の東の縁辺部に当たる。



第1図 羽咋市位置図

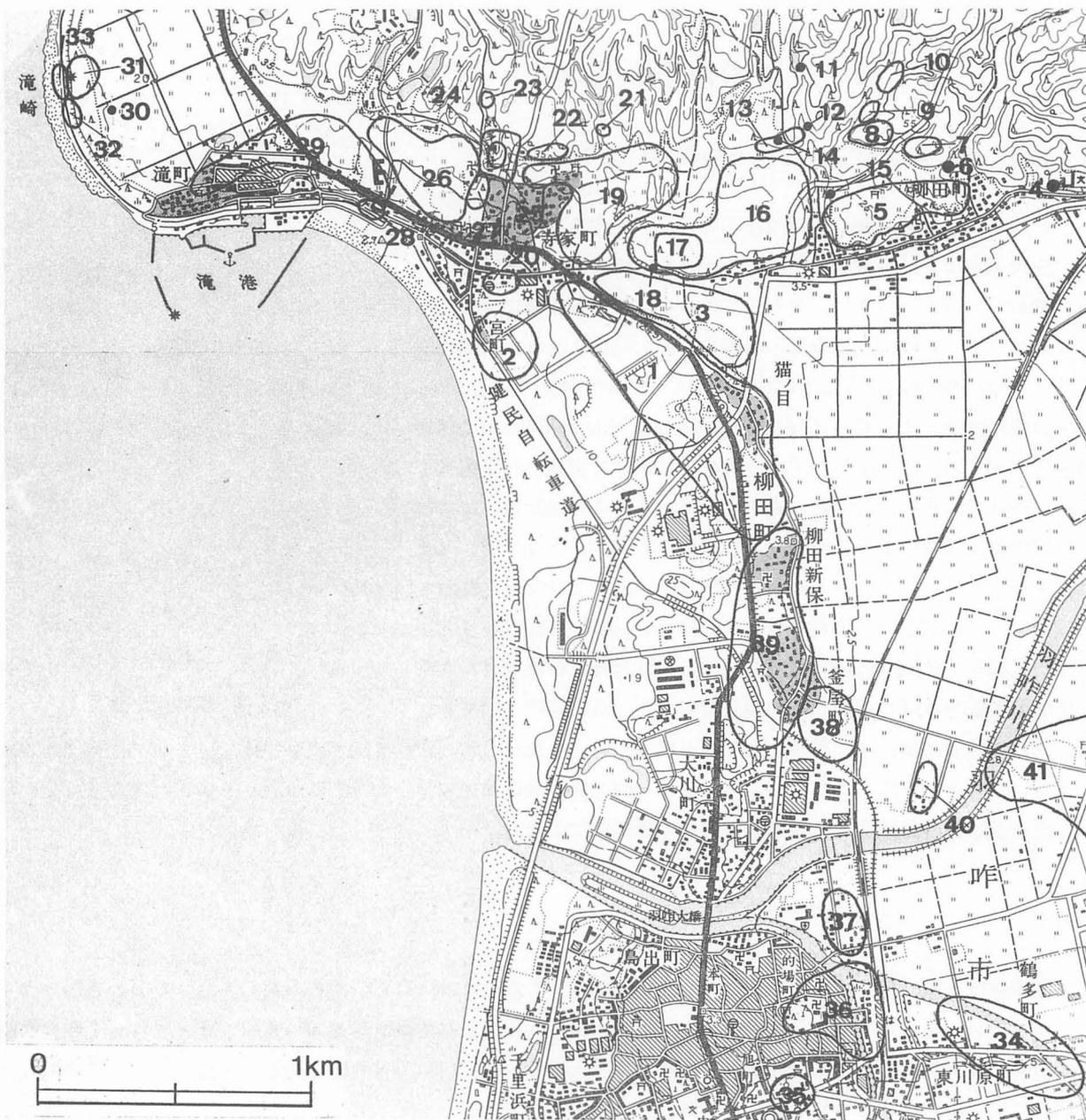
第2節 周辺の遺跡（第2図）

寺家遺跡は、奈良・平安時代を中心とした縄文時代から室町時代におよぶ複合遺跡である。今回の発掘調査でも同様な遺物が出土している。本遺跡周辺は、その地理的環境から古来から交通の要所となってきた。歴史的環境については、10次におよぶ寺家遺跡の他の報告（小嶋他1986、1988、谷内他1989など）[#]に詳しいのでそちらを参照してもらい、今回は簡単に周辺の遺跡について触れておく。

第2図に周辺の遺跡の分布を示した。岩宿時代の遺跡は周辺ではまだ確認されていない。近辺では志賀町で発見例があるので、この周辺でもこれから後見つかるものと思われる。縄文時代は内列砂丘の裏側と、眉丈山山地および海岸段丘に遺跡の分布が広がっている。周辺の遺跡では気多社僧坊群遺跡で出土した縄文前期前葉の土器群が一番古く、寺家遺跡で出土している後期末葉の土器群が一番新しい。弥生時代では羽咋市市街地や邑知潟近辺、あるいは砂丘の前面にまでその分布が広がる。吉崎・次場遺跡は数次にわたって発掘調査が実施されており、前期新段階には集落が形成され、以降古墳時代初頭まで中核的集落として存在していたことが確認されている。また寺家遺跡でも中期頃からの遺物が出土している。

古墳時代では、その前半の様相がはっきりと掴めていない。中葉から後半では海岸段丘や砂丘上に古墳群が展開し、また、柳田古墳群の分布する丘陵の開析谷では、5世紀末葉頃からの須恵器窯が確認されている。集落は、6世紀代まではその様相が掴めない状況にある。

7世紀にはいと状況は一変し、各地に遺跡が認められる。北側の台地上ではまだ少ないものの、寺家遺跡周辺の砂丘地帯では遺跡の確認例が増えている。



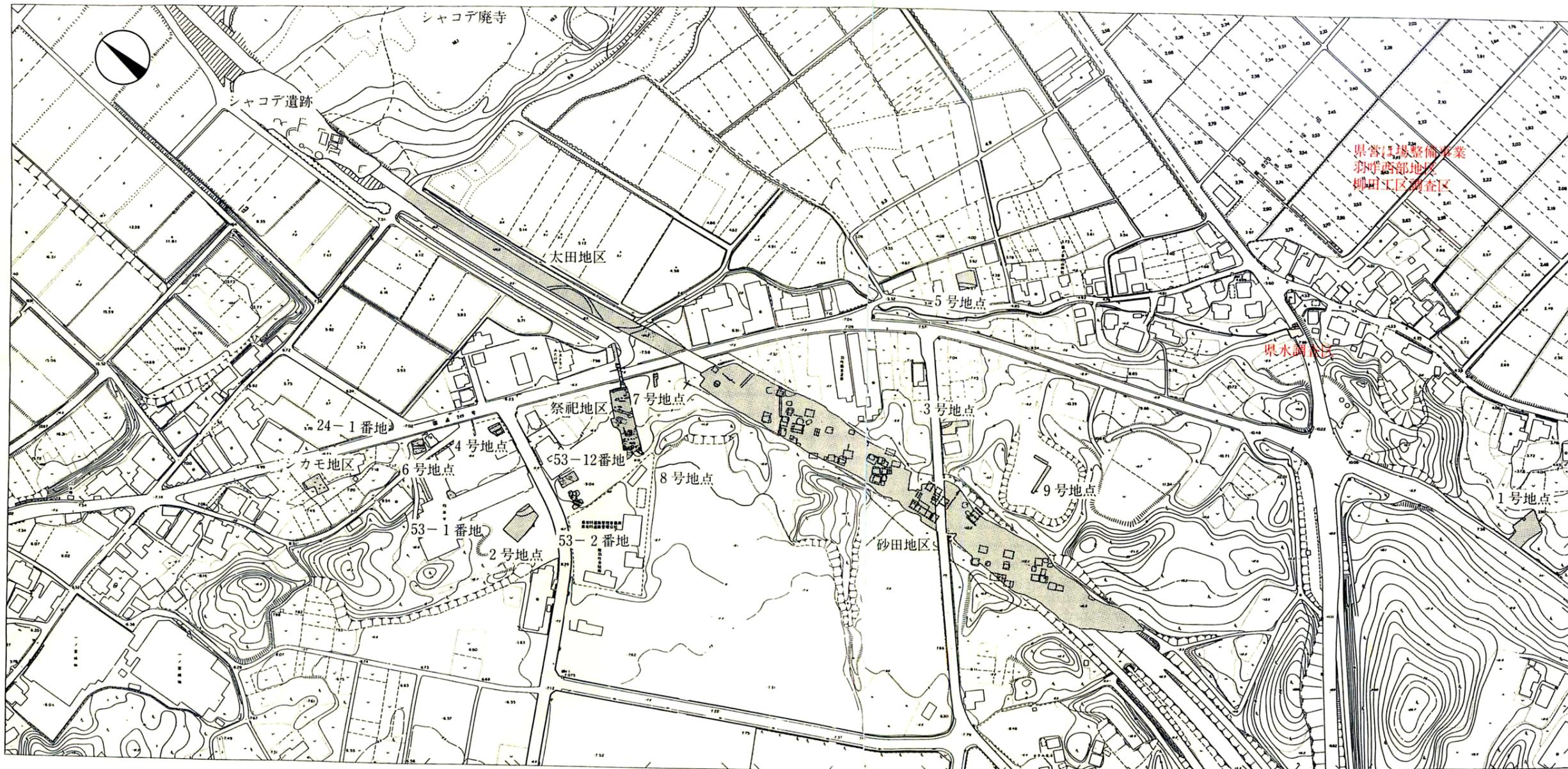
第2図 寺家遺跡と周辺の遺跡 (S=1/2500)

第1表 遺跡地名表

No.	名 称	時 代	種 別	所 在 地	出 土 品 等	備 考
1	寺家遺跡	縄文～中世	祭 祀	羽咋市寺家町 ・柳田町	縄文土器、弥生土器、須恵器、 土師器、中世陶磁器、銅製品、 鉄製品、三彩、ガラス製品	1977～80、85年県教委・県埋 文センター発掘調査。 1980～83、87、89、91年市教 委発掘調査
2	寺家海岸遺跡	弥 生	散布地	羽咋市寺家町	弥生土器	工場用地造成地で採集
3	柳田猫ノ目遺跡	縄文～中世	散布地	羽咋市柳田町 ・寺家町	土器・石器・木器・金属製品	1978、1979年、県教委・県埋 文センター発掘調査
4	柳田ヒガシデ1号窯跡	不 詳	窯 跡	羽咋市柳田町		
5	柳田うわの遺跡	弥生・奈良 ・平安	散布地	羽咋市柳田町	弥生土器壺・甕・高杯・器台・ 石鏃	1958年羽咋高校、71年市史調 査団発掘調査
6	柳田宮の山古墳	古 墳	古 墳	〃 〃		市指定史跡。円墳、長径42m。 三段築成。横穴式石室か。

7	柳田山伏山1号墳	古墳	古墳	羽咋市柳田町	直刀、刀子、馬具玉類、須恵器	市指定史跡。前方後円墳、全長49m、横穴式石室。
	〃 2号墳	〃	〃	〃 〃		市指定史跡。円墳、長径17m。
8	秋田うわの1号墳	古墳	古墳	羽咋市柳田町	直刀、須恵器	円墳、径16m。横穴式石室。
	〃 2号墳	〃	〃	〃 〃		円墳、径13m。
	〃 3号墳	〃	〃	〃 〃		前方後円墳、全長39m、横穴式石室。
	〃 4号墳	〃	〃	〃 〃		円墳、径8m。
	〃 5号墳	〃	〃	〃 〃		円墳、径10m未満。
	〃 6号墳	〃	〃	〃 〃		円墳、径25m。
9	柳田ウワノ1号窯跡	古墳後期	窯跡	羽咋市柳田町	須恵器、鉄滓	
	〃 2号窯跡	不詳	〃	〃 〃	須恵器	
10	松田五郎兵衛山1号窯跡	古墳後期	窯跡	羽咋市柳田町	須恵器甕、杯身、杯蓋、甕、平瓶、円面硯、甑、陶馬	1971年、市史調査団発掘調査
	〃 2号窯跡	〃	〃	〃 〃	須恵器	
	〃 3号窯跡	〃	〃	〃 〃	〃	
	〃 4号窯跡	〃	〃	〃 〃	〃	
11	柳田アサバタケ1号窯跡	奈良	窯跡	羽咋市柳田町	須恵器	
12	柳田タンワリ1号窯跡	古墳後期	窯跡	羽咋市柳田町	須恵器、陶馬、円面硯	1981年県埋文センター発掘調査
13	柳田テンジク1号窯跡	古墳後期	窯跡	羽咋市柳田町	須恵器	
	〃 2号窯跡	〃	〃	〃 〃	〃	
14	柳田テンジク古墳	古墳	古墳	羽咋市柳田町	須恵器、小札様鉄板、鉄鏃、刀子	円墳、径15m。1991年市教委分布調査。横穴式石室。
15	柳田セックテン古墳	古墳	古墳	羽咋市柳田町	須恵器、勾玉	損壊
16	柳田台地遺跡	縄文～中世	散布地	羽咋市柳田町		1978、79年市教委、県埋文センター発掘調査
17	柳田シャコデ廃寺	奈良、平安	寺跡	羽咋市柳田町	瓦、互塔、仏像、土師器、須恵器	1971年、市史調査団発掘調査。1984～86年、市教委詳細分布調査。
18	柳田シャコデ1号窯跡	古墳後期	窯跡	羽咋市柳田町	須恵器	
19	気多社僧坊群遺跡	縄文～中世	散布地	羽咋市寺家町	土器、石器、金属製品	1977、78、84年、県教委・市教委発掘調査
	寺家モスケ古墳	古墳	古墳	〃 〃	須恵器、金環、ガラス小玉	横穴式石室。1991年、市教委発掘調査
20	一ノ宮郵便局遺跡	弥生	散布地	〃 一ノ宮町	壺、甕	
21	大楽寺中世墓	中世	墳墓	〃 寺家町	須恵器、珠洲焼、人骨	
22	寺家中世墓	中世	墳墓	〃 〃		
23	一ノ宮左弥遺跡	縄文	散布地	〃 一ノ宮町	磨製石斧	
24	気多1号中世墓	中世	墓	〃 寺家町		石室
	〃 2号 〃	〃	〃	〃 〃		〃
25	気多神社社叢		天然記念物	〃 〃		(指定年月日 S.42.5.2)
26	寺家一ノ宮遺跡	古墳～中世	集落跡	〃 一ノ宮町 寺家町	土器	1978、79年、市教委発掘調査
27	若宮神社跡	不詳	神社跡	〃 寺家町	礎石	
28	不動寺院跡	中世	寺跡	〃 一ノ宮町	板碑、五輪塔、宝篋印塔	
29	滝1号墳	古墳	古墳	〃 〃	円筒埴輪、須恵器	円墳、径20m

	滝2号墳	古墳	古墳	羽咋市一ノ宮町	円筒埴輪、須恵器 (石錘)	円墳、径20m。横穴式石室。	
	”3号”	”	”	”	須恵器、直刀2、鉄鏃、馬具	円墳、横穴式石室。1979、80年市教委発掘調査。	
	”4号”	”	”	”	天井石、須恵器	円墳、径15m。損壊。	
	”5号”	”	”	”	円筒埴輪、石材	円墳、径50m。損壊。	
	”6号”	”	”	”	円筒埴輪、須恵器	円墳、径25m。	
	”7号”	”	”	”	須恵器	円墳、損壊。	
	”8号”	”	”	”		円墳、径15m。	
	”9号”	”	”	”		自然地形の可能性あり。	
	滝大塚古墳	”	”	滝町一ノ宮町	円筒埴輪、勾玉、須恵器、(石鏃)	円墳、径90m。葺石、竖穴式石室。	
	滝ゴンニョモ山古墳	”	”	滝町		葺石。1957年損壊。	
	滝白山神社古墳	”	”	”	土師器、須恵器	円墳、径20m。葺石。損壊。	
30	滝ザンサ山古墳	”	”	”	石材	円墳、径20m。損壊。	
31	滝オーショージ1号墳	”	”	”	須恵器	円墳、横穴式石室か。損壊。	
	”2号”	”	”	”	須恵器短頸壺、土師器盃、朱塊	円墳か。横穴式石室か損壊。	
	”3号”	”	”	”	須恵器甗、高杯、盃、土師器盃	円墳か。横穴式石室か損壊。	
	”4号”	”	”	”	須恵器高杯、甗、提瓶、横瓶、杯、土師器	横穴式石室か。燈台建設時損壊。	
	”5号”	”	”	”	横瓶、提瓶、甗、杯、直刀、朱塊	横穴式石室か。損壊。	
32	滝・柴垣海岸F遺跡	奈良・平安	製塩跡	”	須恵器、土師器、製塩土器	1990年、富山大学発掘調査	
33	”E遺跡	”	”	”	須恵器、土師器、製塩土器	1970年市史調査団、89、90年富山大学発掘調査	
34	子浦川遺跡	弥生～古墳	散布地	”	鶴多町東河原町	土器	1966年・河川改修時発見。
35	羽咋高校前遺跡	弥生	”	”	旭町	土器	1961～62年建物基礎工事中出土。現市役所前。
36	羽咋御陵山古墳	古墳	古墳	”	川原町		陵墓参考地。前方後円墳か。
	羽咋大谷塚古墳	”	”	”	”		前方後円墳か。
	羽咋水犬塚古墳	”	”	”	”		
	羽咋宝塚古墳	”	”	”	”	須恵器短頸壺(古墳後期)・杯(平安後期) 珠洲焼壺	
	羽咋痛子塚古墳	”	”	”	”	的場町	
	羽咋姫塚古墳	”	”	”	”	東川原町	玉類(散逸)
	羽咋剣塚古墳	”	”	”	”	”	
37	的場農業倉庫前遺跡	弥生	散布地	”	的場町		
38	釜屋倉ノ下遺跡	平安～中世	”	”	釜屋町	須恵器、土師器、珠洲焼	1984、87年、市教委発掘調査。
39	釜屋遺跡	縄文～古墳	”	”	釜屋町柳田町	土器、石器、刀子	1988年市教委発掘調査
40	東釜屋遺跡	不詳	”	”	東釜屋町	土器	
41	吉崎・次場遺跡	弥生～中世	”	”	吉崎町次場町鶴多町	土器、土製品、石器、木器、玉、鏡	1956年羽咋高校、63年市教委・石考研、79～82、86、91年市教委、80～84年県埋文センター発掘調査。国指定史跡。



第3図 寺家遺跡調査区位置図 (1/3,500)

第2表 寺家遺跡の調査経過

調査年度	地区名	調査面積 (㎡)	調査機関
1978	祭祀地区	1,350	石川県教育委員会
	太田地区	1,900	
	砂田地区	500	
1979	太田地区	300	石川県立埋蔵文化財センター
	砂田地区	1,500	
1980	砂田地区	10,000	〃
1981	砂田地区	26	〃
	1号地点	250	
	2号地点	220	
1982	3号地点	150	〃
	4号地点	80	
	5号地点	190	
1983	6号地点	6	〃
	7号地点	29	
	8号地点	325	
	9号地点	70	
1984	53-8番地 (2号地点)	460	羽咋市教育委員会
	53-12番地	72	
1985	泉水調査区	100	石川県立埋蔵文化財センター
1988	24-1番地 (6号地点)	33	羽咋市教育委員会
	53-2番地	52	
1991	シカモ地区 (33番地他)	120	〃
1992	53-12番地	72	〃
	53-1番地	32	
1993	県は羽咋西部地区柳田工区調査区	200	石川県立埋蔵文化財センター

奈良・平安期は砂丘地帯では寺家遺跡を中心として、長者川遺跡など一般集落とは異なる遺跡が目だつ。また、これに呼応して周辺地域で生産遺跡の形成が盛んとなるようである。

中世段階でも一応はこの隆盛が続くものの、寺家遺跡では10世紀、14世紀末に大規模な飛砂現象により、遺跡が縮小している。今回の調査区ではB、C区の溝状遺構はすべて砂で埋まっているものの、遺構の廃絶年代はこれらとは符合しない。しかし、この付近の自然環境の変化が遺跡の廃絶と大きく関わっていた可能性は高い。

註

小嶋芳孝他 1986『寺家遺跡発掘調査報告Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター、小嶋芳孝他 1988『寺家遺跡発掘調査Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター、谷内硯央他 1989『寺家遺跡第8次調査報告書』羽咋市教育委員会などに詳しい。今回の報告もこれらによる。また、第3図および第2表は上記の谷内 1989の図、表に加筆したものである。

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

石川県農林水産部は、農地整備課を主管課として県下のほ場整備事業を進めている。石川県立埋蔵文化財センターは農地整備課に対して次年度実施予定事業の内容照会を毎年行い、関係する埋蔵文化財の保護について協議を重ねている。県営ほ場整備事業羽咋西部地区柳田工区は、農地流動化特別促進ほ場整備実験事業として平成2年度の事業照会に平成3年度施工区としてあげられ、以降、平成6年まで実施工区に対し埋蔵文化財の分布調査を行っている。この結果、平成5年度工事施工区で周知の遺跡である寺家遺跡の延長がこの施工区まで広がっていることが確認され、協議の結果、排水路敷設部分に対しては発掘調査を実施し記録保存とすることとなった。

第2節 調査経過（第4図）

発掘調査は、平成5年5月の連休明けから開始した。発掘調査地点は砂丘の裏側に弧状に南北に延びる現柳田町の集落のほぼ中央東側の水田で、旧邑知潟に面している。調査対象となったのは排水路敷設部分で、砂丘がやや張り出した部分の南の排水路敷をA区、猫の目の交差点から北に向かう県道七尾・羽咋線ぞいの排水路敷をB区、後述する様にB区の排水路敷を南に延長した部分をC区とした。第4図は、調査区とほ場整備前の水田を基にした等高線図であるが、これを見るとA区、B区の部分が旧邑知潟にやや張り出す地形であったことがわかる。

5月6日に現場事務所をA区南側の農道脇に設置し、発掘調査用の器材の搬入を済ませ、翌7日に羽咋土地改良事務所の工区担当者と現地で打ち合せを行った。休み明けの10日に重機を搬入し、A区、B区の表土を除去した。A区は、ベース面が褐色の砂層で南に緩く下がり、調査区北側約3分の1は、鞍部であることが判明した。翌11日から作業員を投入し、A区から本格的に発掘調査を開始した。遺構検出を進めて行くと、柱穴、溝等が検出されたが、遺構は思いのほか少ない。遺構の掘削を始めてみるとどれも浅く、遺構はかなり削平を受けていることが判明した。鞍部も精査を進めると落ち際に落ち込みが確認され、さらに掘り下げると平安時代の土器と共に檜扇が出土した。これ以外の遺構は確認されず、また、遺物の出土もなかったため、鞍部の調査はこの面までにとどめた。壁面の精査を進めて行くと、調査区の南では緩く下がっていく褐色のベース面の上に黒灰色土上面をベース面とした溝が掘り込まれていたことがわかり、重機での表土除去が掘りすぎであったことが判明した。5月17日にはA区の測量を終えB区の調査を開始した。

B区では調査区の北端で砂で充填され、調査区に直交する溝1条（B区1号溝）が確認できたのみであった。遺跡範囲の北端がB区の端であったため、確認のため北側に調査区を拡張した所同様な溝がもう1条確認された（B区2号溝）。このため、今度は調査区北端から20m離れた地点に試掘坑を設け掘り下げたが、遺構は確認されなかった。1号溝、2号溝を掘り下げると木皿、人形等が出土した。B区調査中に羽咋土地改良事務所から計画変更でB区の排水路を南に延長することになったとの連絡があり、急きょこの部分をC区として発掘調査を実施することとなった。

B区の調査を20日に終了し、休み明けの24日にC区の表土除去を行った。遺構検出を進めるとB区と同様で、砂で充填された溝が現集落がのる砂丘の張り出しに平行する方向で3条検出された。また、排水溝掘削の際に調査区南端にこれらより下層に溝が1条走ることが確認された。これとは別に調査区北側より畦状の盛り上がりを検出している。26日には上層の調査を終え、下層の調査を開始した。すると上層の溝と同様な方向に流れる溝が検出され、掘り下げると古墳時代の土器と木製遺物が出土した。これと並行してB区で確認した溝の延長を確認するため、B区東方に試掘坑を設定した。1号溝については水田4枚分約45mまでその延長を確認できたが、2号溝は10m地点で確認できなくなった。5月27日までにC区、B区東方試掘坑の測量を終え、28日に器材の引き上げを行い現地調査を終了した。



第4図 調査区の配置と周辺の地形 (S=1/3,000)

第3章 遺構と遺物

第1節 遺構

1 土層の対応関係について（第7・8・10図）

本遺跡の土層の堆積状況は各調査区にて個別に行い総体的に判断した結果、基本土層としてⅠ～Ⅴの5層を確認することができた（第10図参照）。Ⅰ層は灰色系砂質土で中世以降（C区出土遺物105～107等）、Ⅱ層は暗ないし黒灰色系砂質土で平安時代後期（B区出土遺物37・同東方試掘坑出土遺物63・73等）にあたる土層で、遺構は検出されなかった。Ⅲ層は灰色系砂～砂質土で平安時代中期（主として11世紀前半）にあたりB区1・2号溝、C区1・2・4号溝を検出した。Ⅳ層はⅢ層とⅤ層の間層に位置付けられるもので、出土遺物による時期判断は難しいが、B区1号溝下面より奈良平安時代の遺物（17）を確認していることよりこの時期の可能性を示唆できる。Ⅴ層は濁灰色砂で、古墳時代末期のC区3号溝他を検出している。ただA区においては遺跡の立地が他の調査区に比べ、砂丘地からの張り出し部分が大半を占めること、不明落ち込み遺構の堆積状況等より対応関係の断定は難しいが、A区4層についてはⅠないしⅡ層に対応するものと思われる。また、これらⅠ～Ⅴ層の寺家遺跡本体（砂田・太田地区『寺家遺跡発掘調査報告Ⅰ・Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター1986・1988）との対応関係は、Ⅰ層は寺家第1層、Ⅱ・Ⅲ層は寺家第2層にあたり、その上層にはⅡ層、下層にはⅢ層が相当し、ⅣとⅤ層は寺家下層の第4・5層に各々対応されるものと思われる。なお、9世紀末ないし10世紀前半と14世紀末の2度起きた砂丘の飛砂現象は標高8mに位置する1985年度排水調査区では確認されており、飛砂の範囲としては標高3m程度の現在の集落辺まで厚く、本調査区付近ではその影響は薄いものであったことが土層観察の結果判明した。

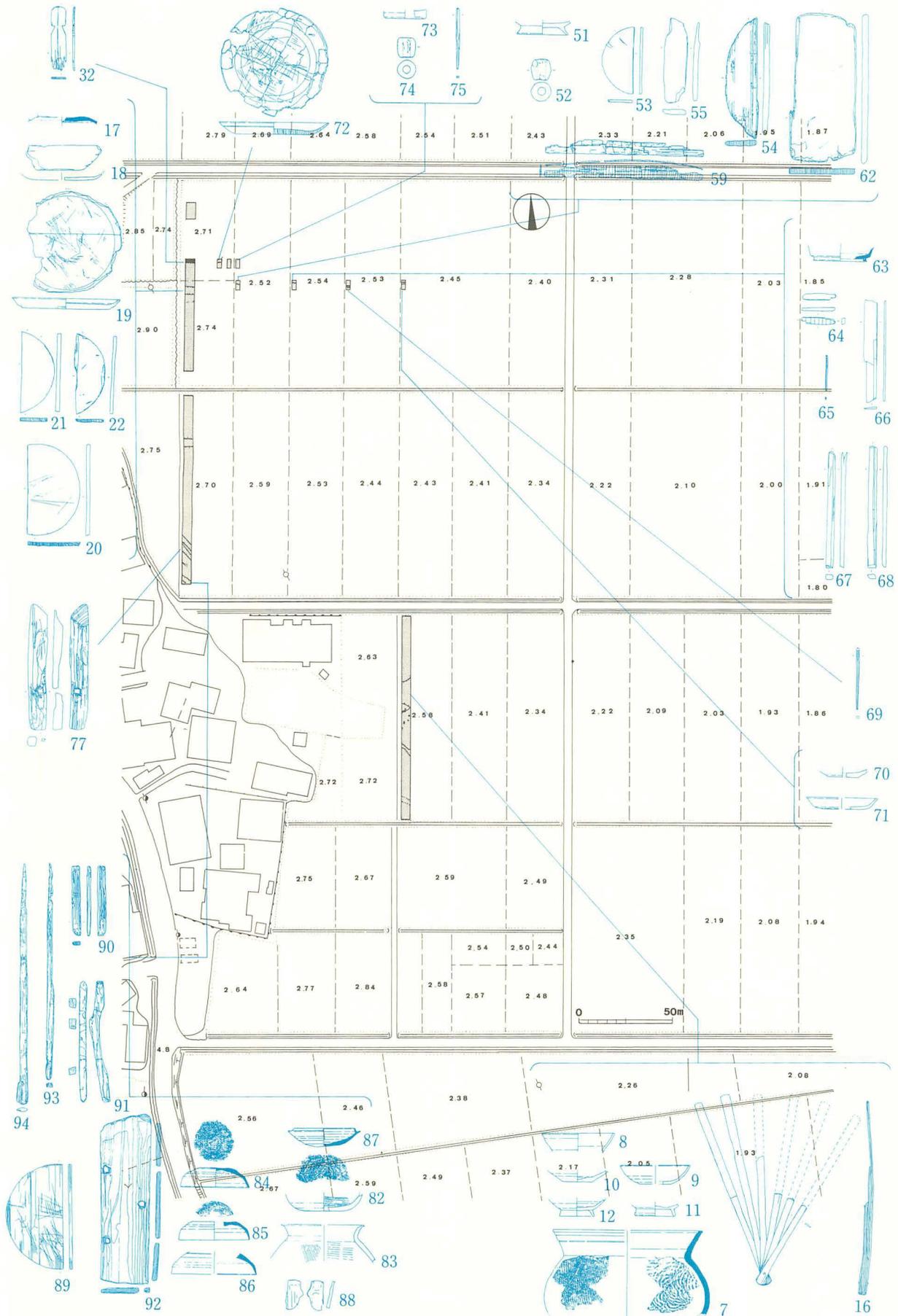
2 A区の遺構（第6・11・12図）

A区は中央部が高く、南端に向かって緩く傾斜している。また、北側は鞍部となる。遺構検出面は削平を受けており、本来、この中央部はさらに高かったものと思われる。この部分で検出した遺構は、溝状遺構2条、柱穴状遺構9基であるが（第6図）いずれの遺構も浅い。遺構の覆土はいずれも黒色系の色調を示す。柱穴の配列から掘立柱建物の想定も可能であるが、限定された調査区ゆえははっきりとしない。A-5区で断面観察により溝状遺構を確認しているが、中央部の遺構より新しく中世段階の遺構と考えられる。

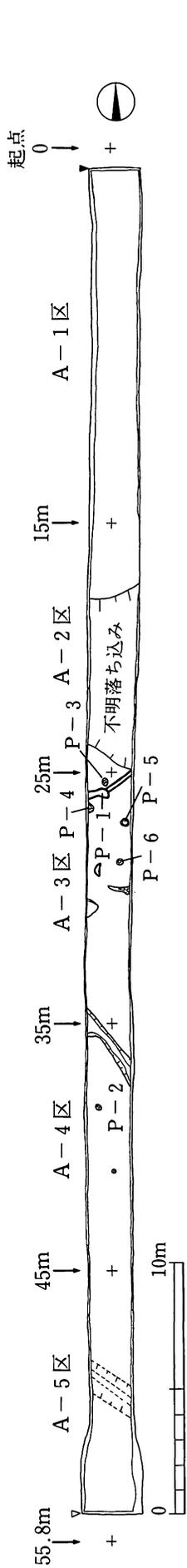
A-1、A-2区は鞍部で中央部の遺構検出面である褐色の土層を確認していない。おそらく、旧邑知瀧の縁辺部で、瀧の水位の変化で陸化した時期もあったと思われるが、うまく捉えられなかった。土層断面の観察では6層、あるいは13層をベースとした流路の存在が疑われ、不明落ち込みとしたものも砂丘の張り出しの縁辺を流れる流路と考えられる。この遺構は16～21層をベース面とし、底面付近から平安期の土器を主体に出土し、これに第17図の扇が伴っている。

3 B区、B区東方試掘坑の遺構（第8・13図）

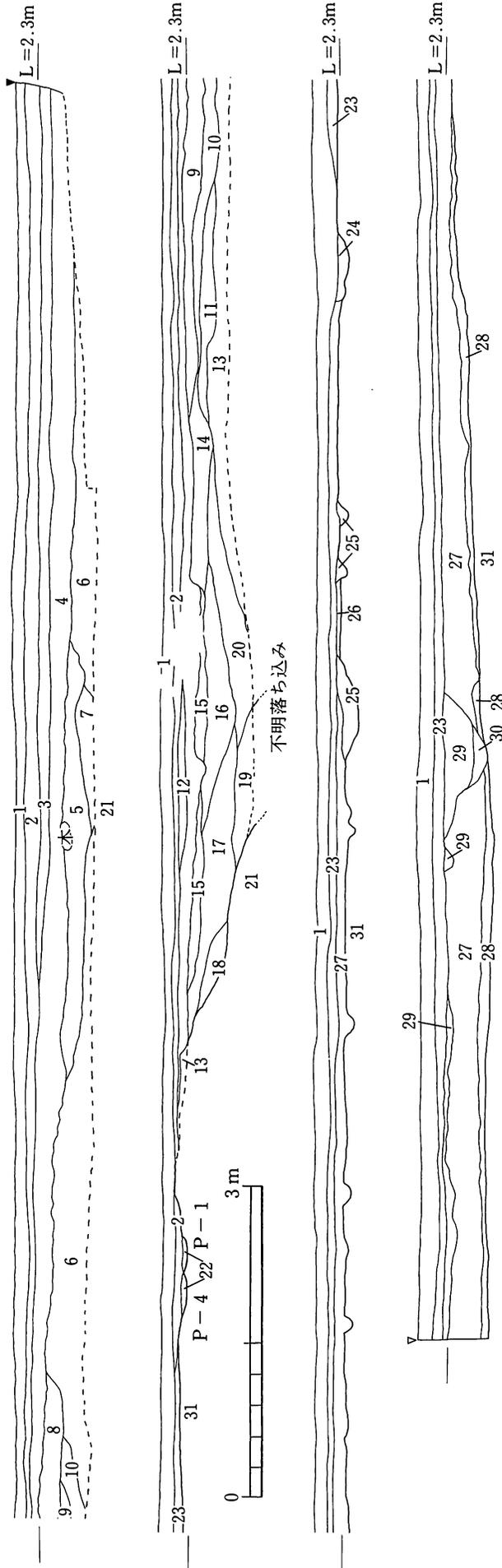
B区では、A区中央部で確認できたベースを確認していない。遺構は、東西方向の平行する溝2条を確認したのみであるが、これらより上位の6層で中世段階の遺物が出土している。溝はいずれも14層の暗褐色砂質土をベースとし、覆土は灰白色系の砂である。1号溝は幅約1.3m、深さ約0.3mで底面から緩く立ち上がるが、北側の立ち上がり方が2段となり、2条の溝の重なる可能性が高い。土層観察からすると3条の可能性もある。また、南側立ち上がり付近に溝の方向とはやや異なるが、打ち込まれた杭が3本残存している。また北側立ち上がりにも1本杭が打ち込まれている。溝底からは墨書を持つ須恵器の坏蓋が、覆土からは木皿を含む木製品が出土している。



第5図 調査区と主な出土遺物 (S=1/3,000)

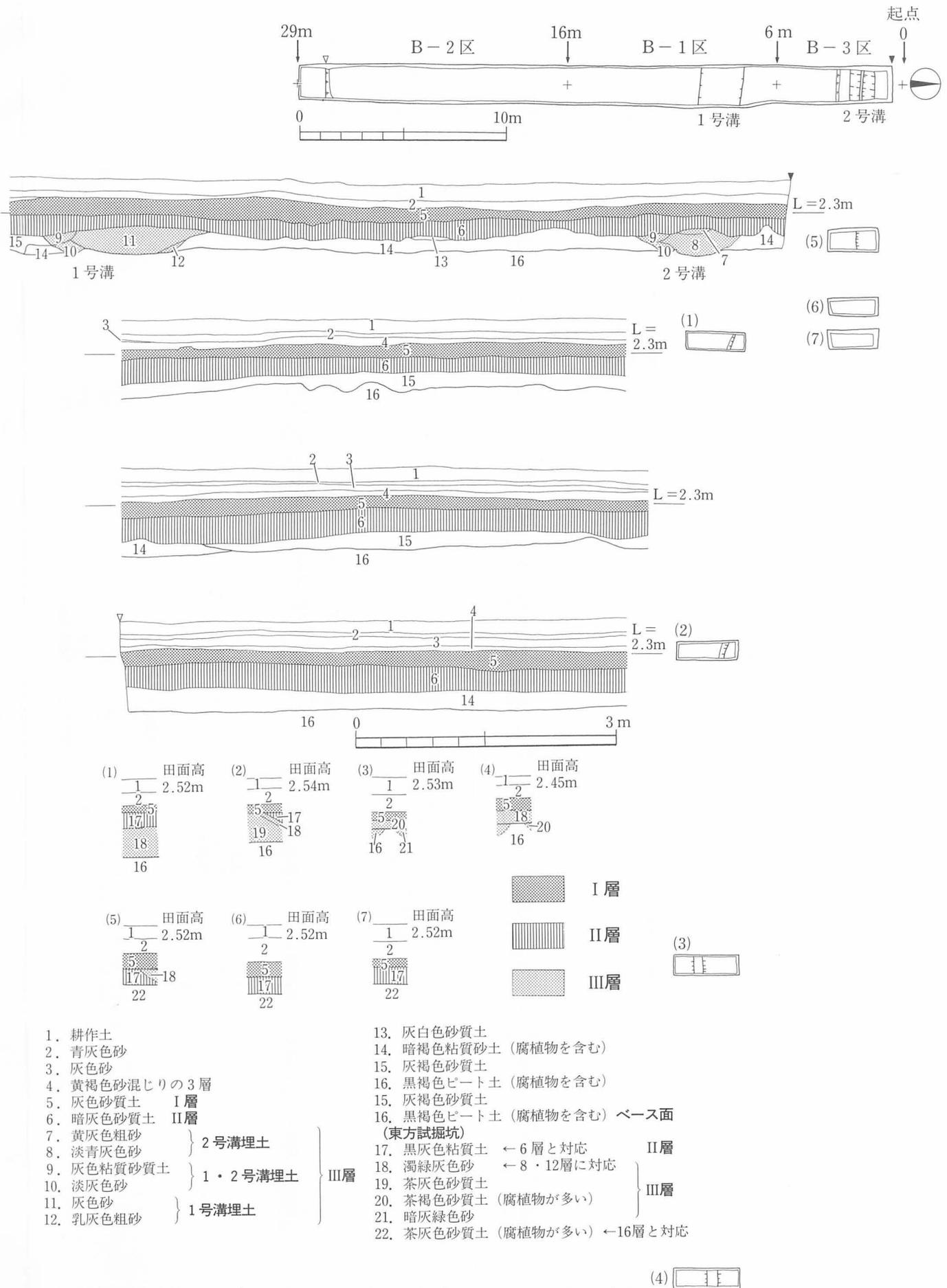


第6図 A区遺構平面図 (S=1/250)

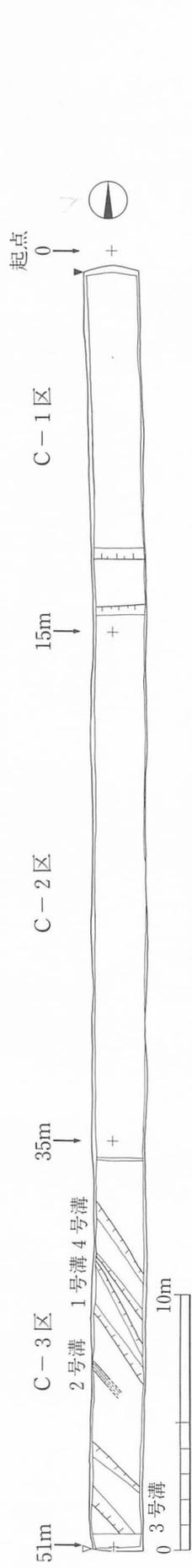


- | | | |
|------------------------|-------------|--------------|
| 1. 耕作土 | 23. 暗灰色砂質土 | } Pitと溝状遺構埋土 |
| 2. 床土 | 24. 灰色粘質土 | |
| 3. 淡黄灰色砂質土 | 25. 黑色砂質土 | } 溝状遺構の埋土か |
| 4. 暗茶褐色砂質土 | 26. 黒灰色砂質土 | |
| 5. 茶灰色粘質土 (有機物を多量に含む) | 27. 黒茶褐色砂質土 | } 不明落ち込み埋土 |
| 6. 黒色粘質土 | 28. 黒茶褐色砂質土 | |
| 7. 白色粗砂 | 29. 暗茶褐色砂質土 | } 溝状遺構の埋土か |
| 8. 茶灰色砂質土 (有機物を含む) | 30. 黄褐色砂 | |
| 9. 茶灰色砂質土 (有機物を含む) | 31. 褐色砂 | } P-1・4 遺構埋土 |
| 10. 暗茶灰色砂質土 (有機物を含む) | | |
| 11. 濁黄灰色砂 | | |
| 12. 暗茶色砂質土 | | |
| 13. 淡灰色砂 (黒色土を薄い層状に含む) | | |

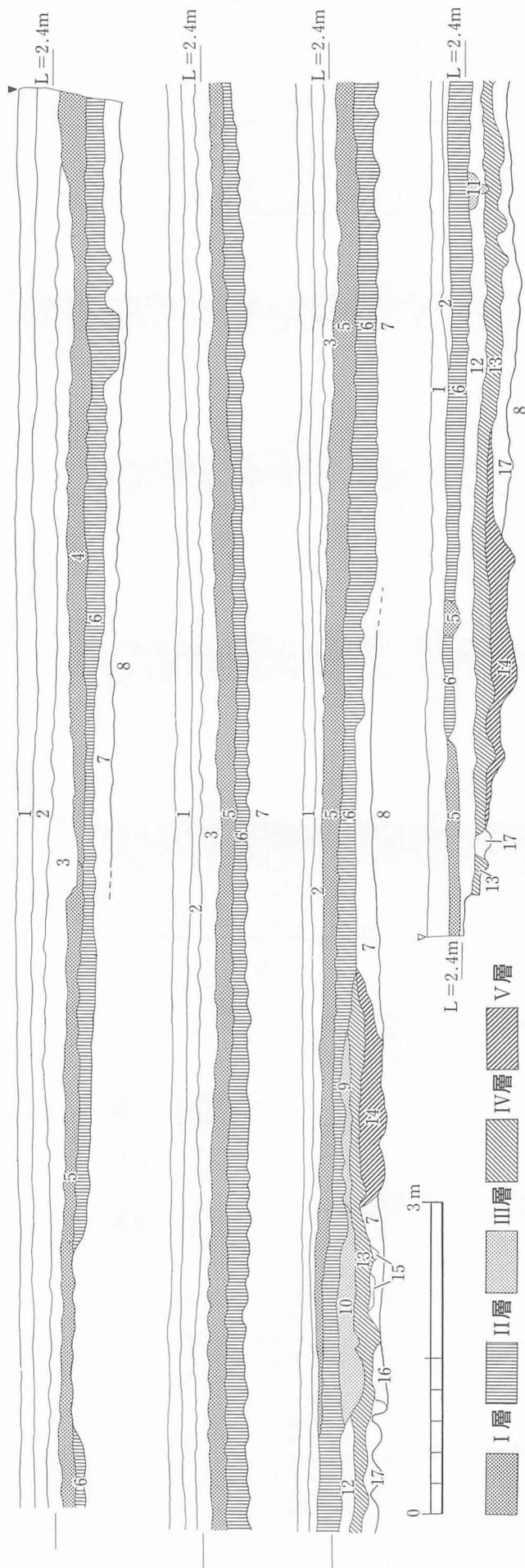
第7図 A区土層断面図 (S=1/60)



第8図 B区・B区東方試掘坑平面図 (S=1/250) と土層断面図 (S=1/60)

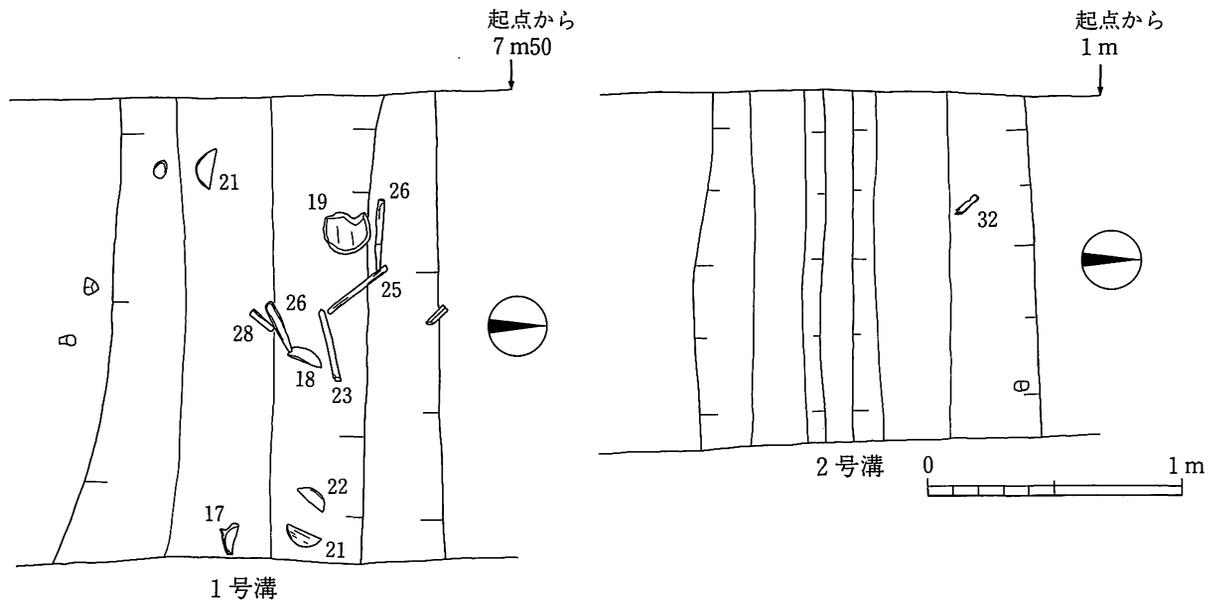
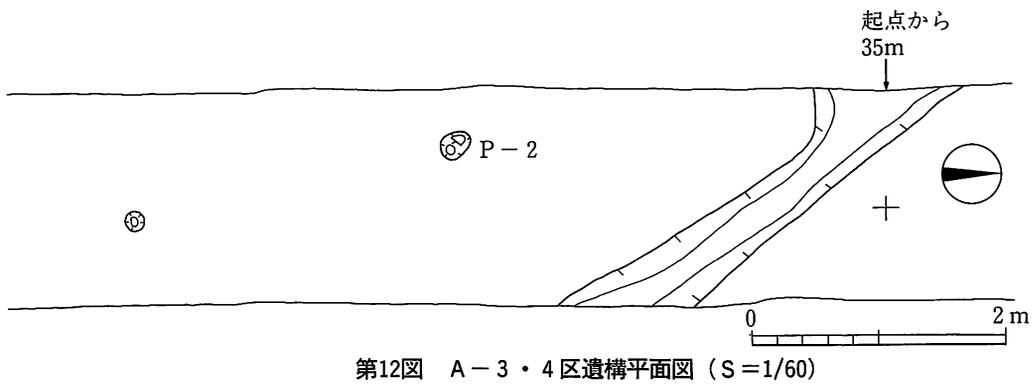
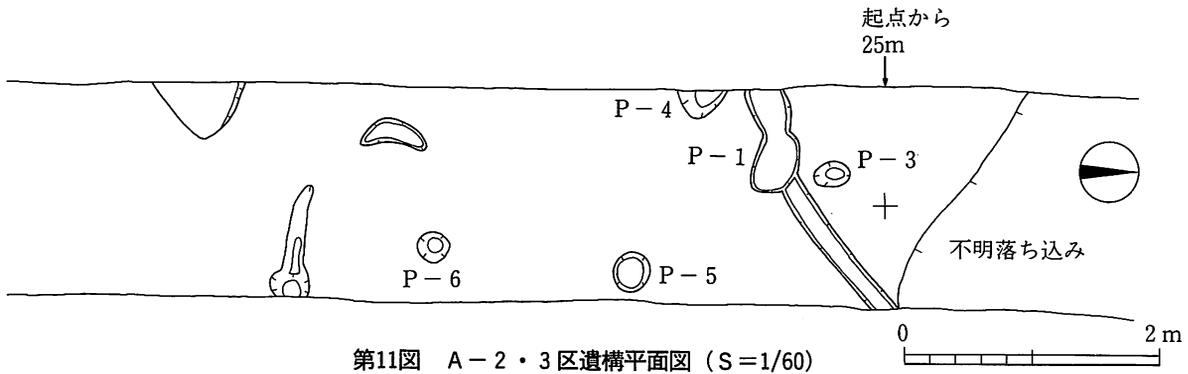


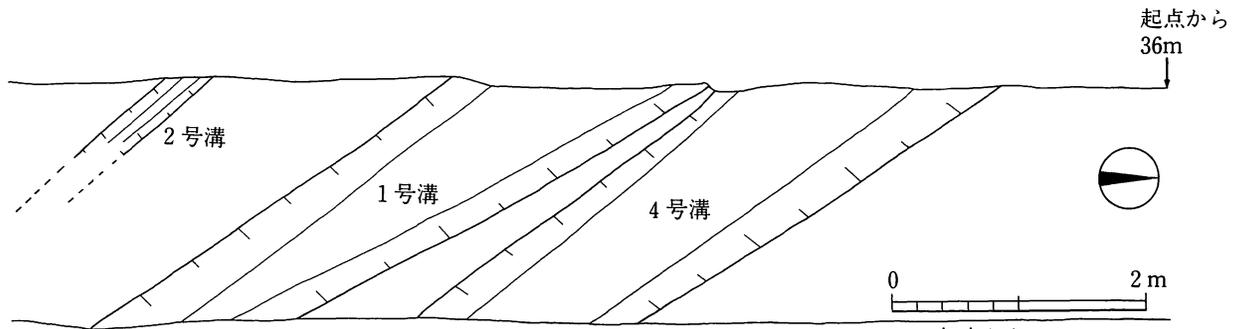
第9図 C区遺構平面図 (S=1/250)



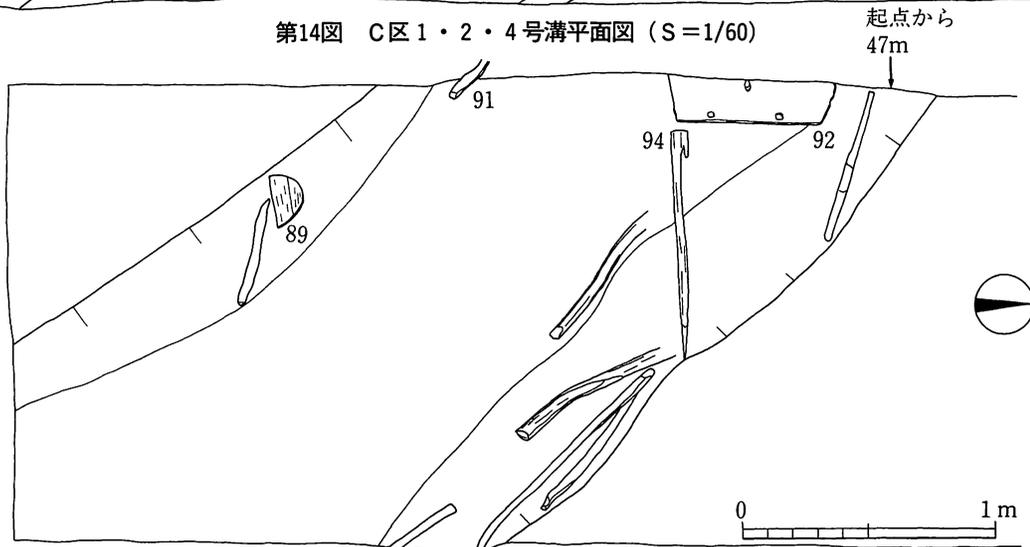
- | | | | |
|------------------|----------------------------|-------|--------|
| 1. 耕作土 | 9. 茶灰色砂質土 | 4号溝埋土 | } III層 |
| 2. 淡灰色砂質土 | 10. 濁(黄) 灰褐色砂 (黒灰色土を層状に含む) | 1号溝埋土 | |
| 3. 灰色砂質土 | 11. 濁緑灰色砂質土 | 2号溝埋土 | |
| 4. 暗灰褐色砂質土 } I層 | 12. 黒褐色砂質土 | | |
| 5. 暗灰色砂質土 } II層 | 13. 茶灰色砂質土 | IV層 | |
| 6. 黒褐色砂質土 } III層 | 14. 濁灰色砂 (黒灰色土を層状に含む) | 3号溝埋土 | V層 |
| 7. 茶灰色砂質土 } ベース面 | 15. 緑灰色砂 | | |
| 8. 黒色ピート土 | 16. 茶灰色砂質土 (腐植物が多い) | | |
| | 17. 茶褐色砂質土 (腐植物が多い) | | |

第10図 C区土層断面図 (S=1/60)





第14図 C区1・2・4号溝平面図 (S=1/60)



第15図 C区3号溝平面図 (S=1/30)

2号溝は、1号溝の北側約6.5mに位置する。2条の溝の重なりで、二つを合わせた上幅で約1.4m、深さは両溝とも約0.3mである。いずれも底面から緩く立ち上がるが、北側の立ち上がりには一本の杭が打ち込まれており、土層断面の観察からは溝3条の重複の可能性が窺われる。覆土から人形などが出土している。

この2条の平行する溝が道路状遺構の側溝では、という想定から15mごとに試掘坑を設定し、その延長を確認した。1号溝は45mまでその延長を確認できたが、2号溝は10m地点で捉えられなくなり、調査区とこの10mトレンチの間にさらにトレンチを設け、その行方を追求した。その結果、7m地点までは一応その延長が確認できた。

4 C区の遺構 (第9・10・14・15図)

C区もB区と同様な土層堆積状態を示す。特に1、2、5、6層は同じである。遺構は、この6層以下で認められた。C-1区では、畦状の遺構がこの6層に覆われた形で確認された。この遺構は下幅約2m、上幅約1.8m、高さ約0.25mで東西方向に延長を持つ。土層断面の観察ではC-3区北端付近でも同様な盛り上がり確認できるが、平面では捉えられなかった。この付近から南側では6層が徐々に薄くなり、また、下底面の標高も高くなる。C-2区では遺構は検出されていない。C-3区では、上下2層にわたって遺構面が確認できた。いずれも溝状の遺構で、北西から南東に向かう方向を採る。2号溝は12層をベースとし、覆土は汚れた緑灰色の砂質土である。南東側はベース面を掘りすぎてしまっている。幅約0.25m、深さ約0.15mである。1号溝、4号溝も12層をベースとして検出され、土層観察により1号溝の方が新しい。覆土は4号溝が茶灰色の砂質土、1号溝が汚れた黄褐色の砂である。1号溝は南東部のベース面を掘りすぎている。両者とも幅約1.2mで、深さは1号溝が約0.15m、4号溝が約0.1mである。1号溝から木製品が出土している。3号溝は17層をベース面とし、覆土は汚れた灰色の砂である。幅約3.5m、深さ約0.2mで、覆土から7世紀前後の土器と木製品がまとまって出土している。

第2節 遺物

1 A区の出土遺物（第16・17図）

縄文土器

縄文土器は後期のものを中心に1～3が出土している。1は深鉢の口縁部で、器面に斜線文を施し、この上に細い粘土紐を貼り付けてある。

弥生土器

4・5はともに2号溝より出土したもので壺の破片である。両者とも外面に条痕文が施されている。時期は柴山出村式に比定されると思われる。6はA-1区6層の黒色粘質砂質土より出土した弥生後期後半にあたる高坏の坏部であろう。

須恵器

7は不明落ち込みの埋土19層黒褐色粘質砂質土より出土したもので、口縁部と頸胴部をあわせ図上復元したものである。外面はタタキののちカキ目を施し、内面には同心円文状当て具痕が認められる。色調は外面が灰白色を内面は灰色を呈し、焼成はあまい。

土師器

土師器は不明落ち込み埋土16層淡黄灰色粘質砂質土（有機物を多量に含む）より出土した。8は碗口縁部で口径13.4cmを測り、色調は灰黄褐色をなし、焼成は良い。9は無台碗で底部は回転糸切り痕を認める。色調は褐色を呈し、焼成は良い。10は皿底部で底径5.5cmを測る。調整はへら削り後ナデを行い、底部は回転糸切りによる。色調は内面は浅黄色で外面は明褐灰色を呈し、焼成は並である。11～13は貼り付け高台碗で断面三角形を呈するタイプのものである。11は底径7cm、台径7.5cmを測り、色調は褐色で、焼成は並である。また、口縁部破片8との接合資料となるかもしれない。12は底径5.9cm、台径6.5cmを測り、胎土に海綿骨針を含む。色調は褐色で、焼成は並である。13は底径8cm、台径7.8cmを測り、色調はにぶい褐色をなし、焼成は良い。

その他

14は19層～20層にかけて出土した製塩土器である。外面には粘土紐輪積み痕が顕著に、内面においては指圧痕が認められる。時期は19層に7の須恵器が出土していることからほぼこれに比定されよう。15は不明落ち込み埋土中より出土した磨石で自然石を素材とし石質は安山岩である。最大長11.9cm、最大幅8.6cm、最大厚5.2cm、重量795gを測る。

木製品

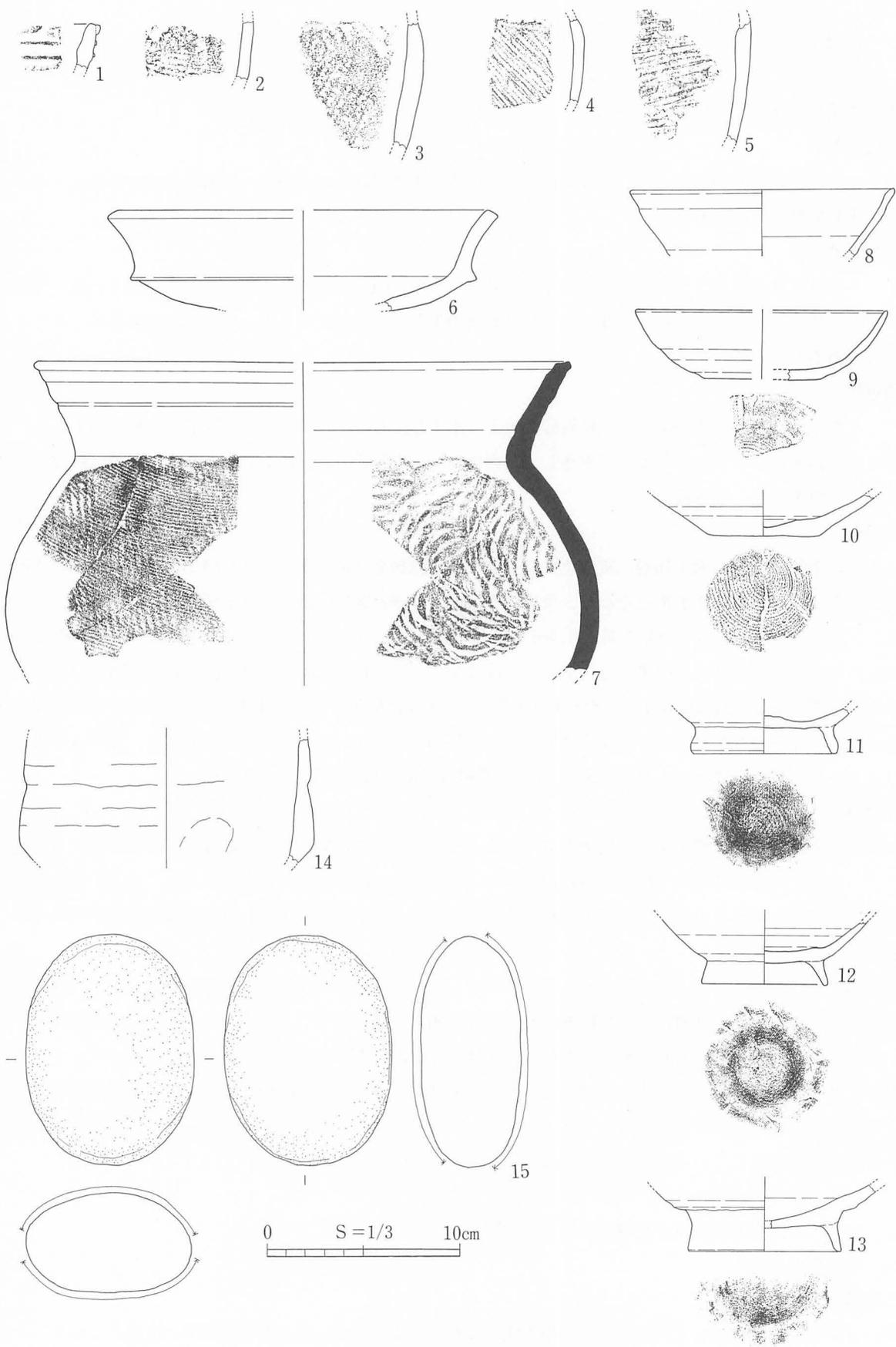
16は不明落ち込み埋土16層淡黄灰色粘質砂質土（有機物を多量に含む）より出土した扇で、扇骨は6枚を数える。要の穴は1穴で木釘が残り、形状は基部の端を丸く仕上げ、先端に向かって若干幅が広がっていく。また、基部端より17.5cmのところ糸綴りによると思われる痕跡が3骨において認められる。現存する骨は6枚であるが、要の木釘の残存状況からすると、もう1枚はあった可能性が高いと思われる。時期は出土層の第16層に前述の土師器が共伴出土していることよりこれに比定される。樹種はスギである。

2 B区・B区東方試掘坑出土遺物（第18～23図）

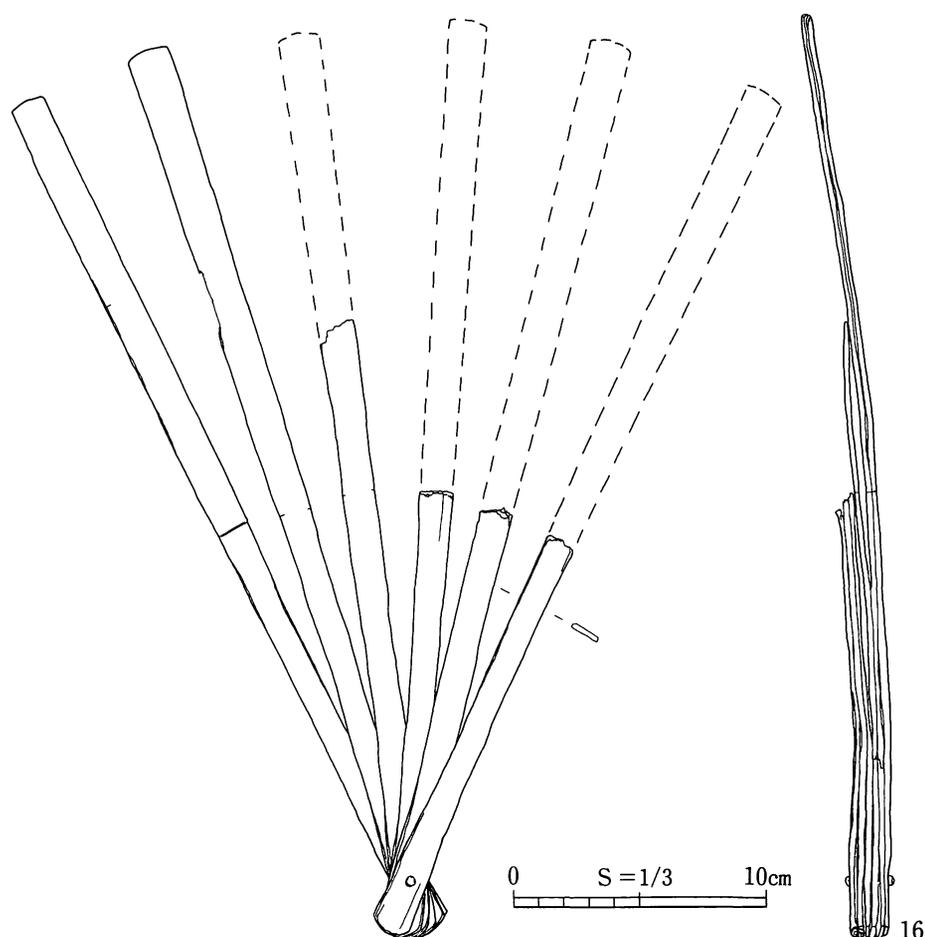
(1) B区出土遺物

1号溝

遺物は第8層より出土しているが、その最下底面より17が出土している。土層断面図には図示しなかったが、精査の結果、微細ではあるが、上層と下層に分けてみるができる。



第16图 A区出土遗物 1



第17図 A区出土遺物2

上層からは木製品を出土している。まず飲食器として皿が2点(18・19)出土している。木取りはともに柂目である。19の内面見込には斜格子状の刃物痕が認められる。これはノミで削る場合において刃部を越えて不用に剝離されるのを防止する目的で、予め傷をつけたものの痕跡であると思われる⁽¹⁾。次に曲物の底板にあたる円形板が3点(20~22)出土している。これは側が垂直ではなく若干の角度をなしていることより、上(内)面と下(外)面の区別をなした。また木釘痕が、20は5箇所、21は2箇所、22は1箇所にて認められる。23は斎串で、細長い板材の上端を圭頭状にしており、表面は割り剥いたままで、下端は折れてしまったものであろう。24~28は加工痕の認められる、棒ないし板状木器である。24のみ二次的に火を受けた形跡がみられる。

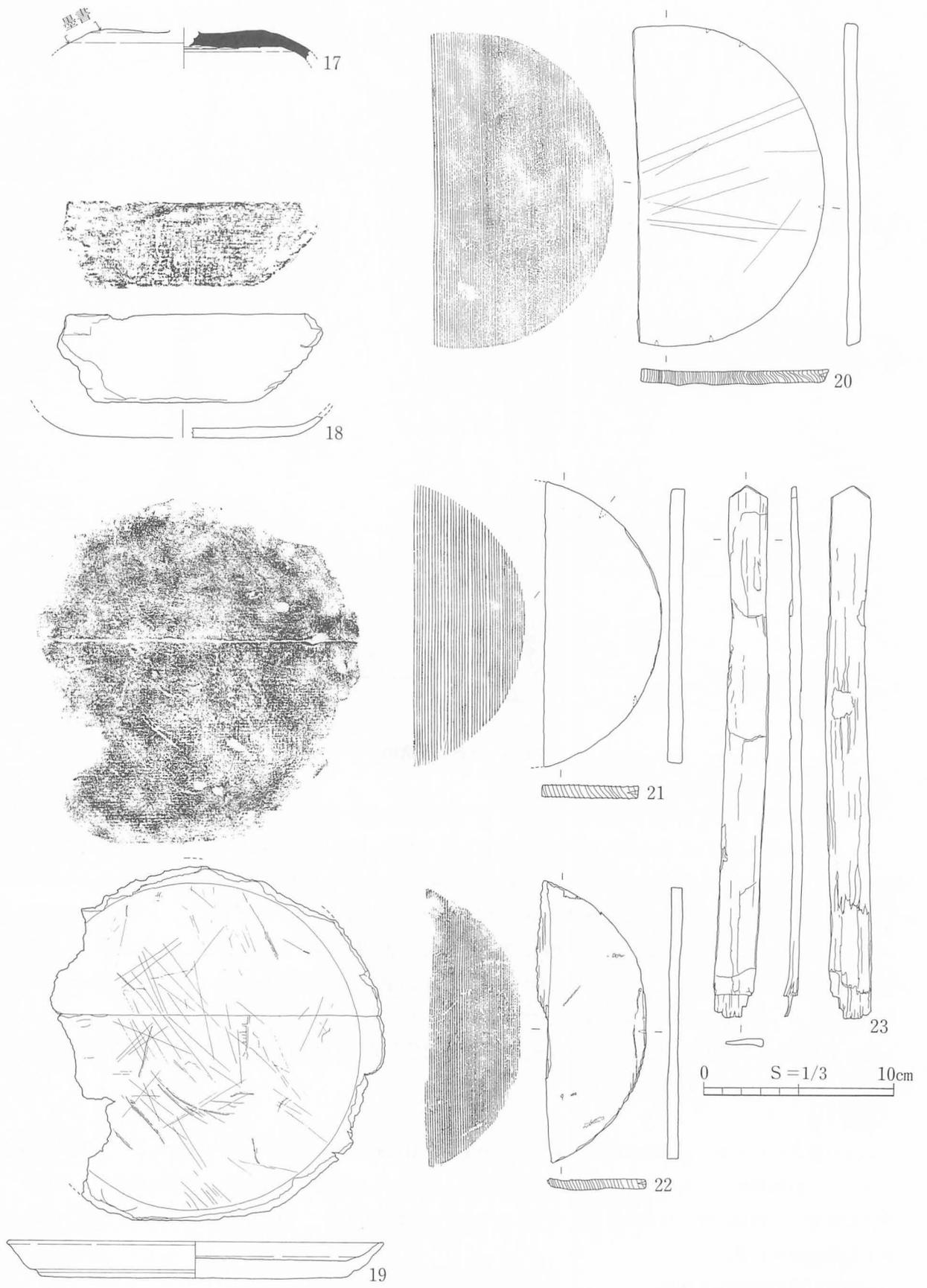
下層出土遺物としては17の須恵器坏蓋である。色調は灰白色を呈し、焼成は良い。また、外面に判読不明の墨書が認められる(図版10-17)。

2号溝

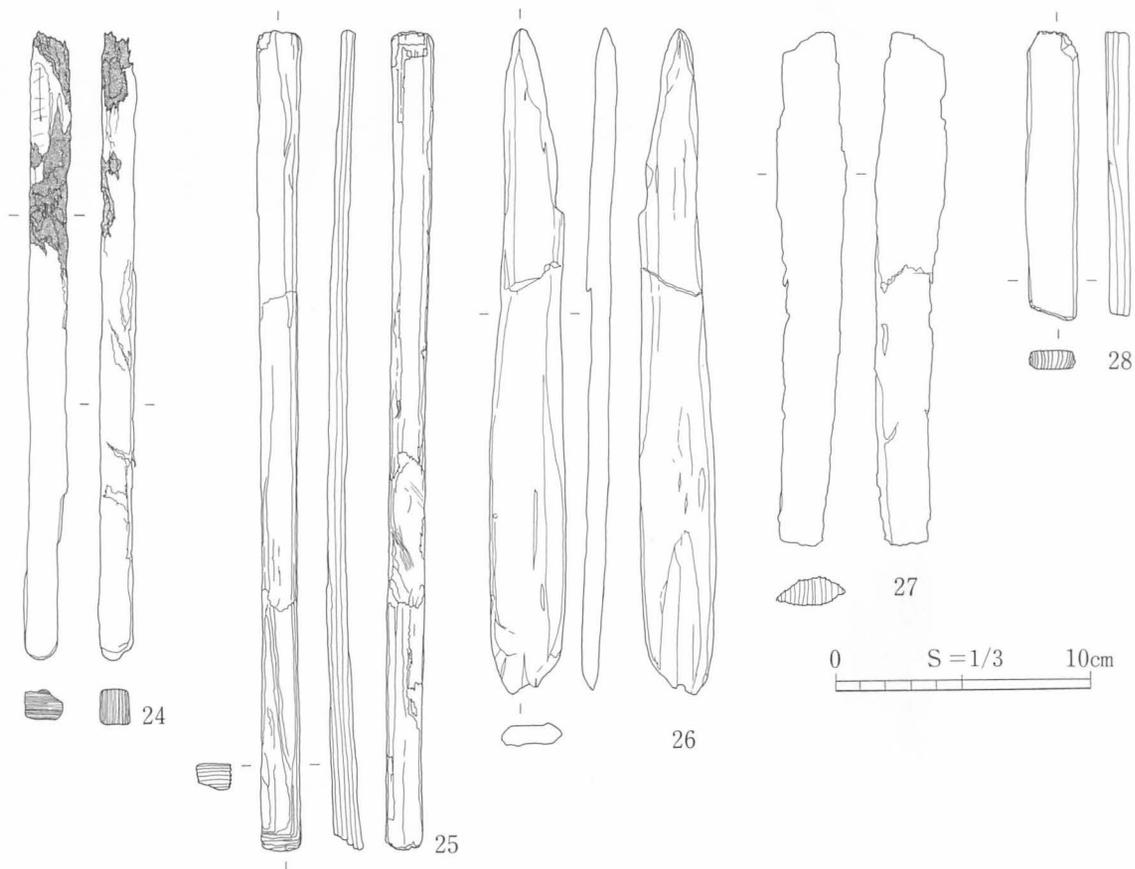
木製品の出土を認める。29・30はともに箸状製品である。31は断片であるため予測ではあるが、若干の湾曲形状からみて、曲物側板となる可能性がある。32は人形で、いわゆる偏平型で頭部は丸く顔部は細長で、側面の上下から切り欠いて肩部が作られる撫肩タイプである⁽²⁾。33~35は板状木器で、34には木釘によるものと思われる孔穴が1箇所認められる。

包含層及び層位不明出土遺物

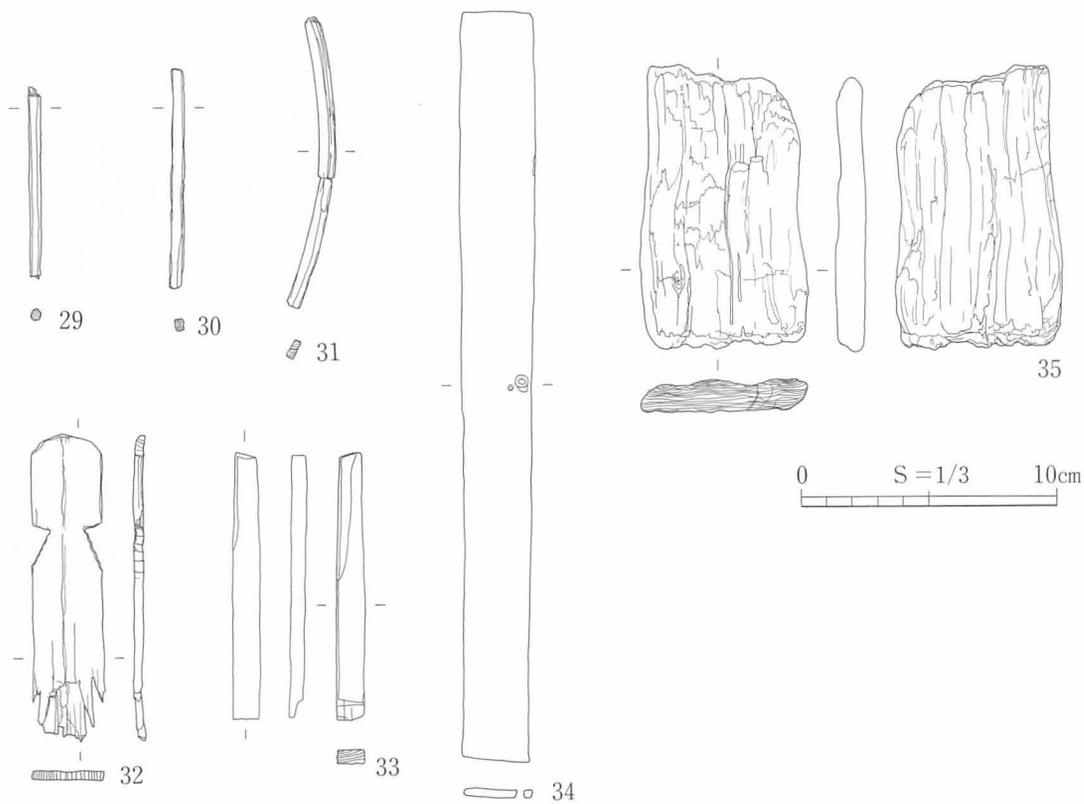
36は須恵器杯身で口縁部は内傾して立ち上がり、口縁端部は丸みを持ち、わりと浅いタイプのものである。色



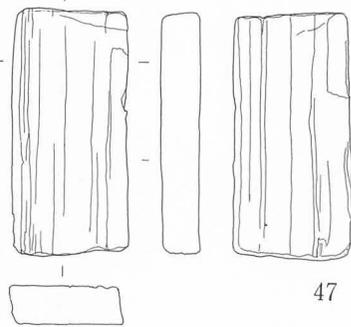
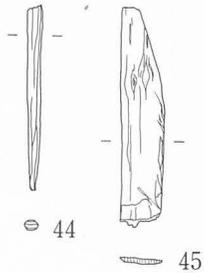
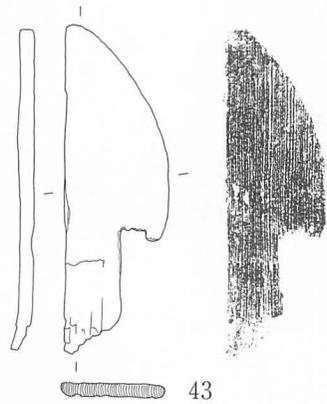
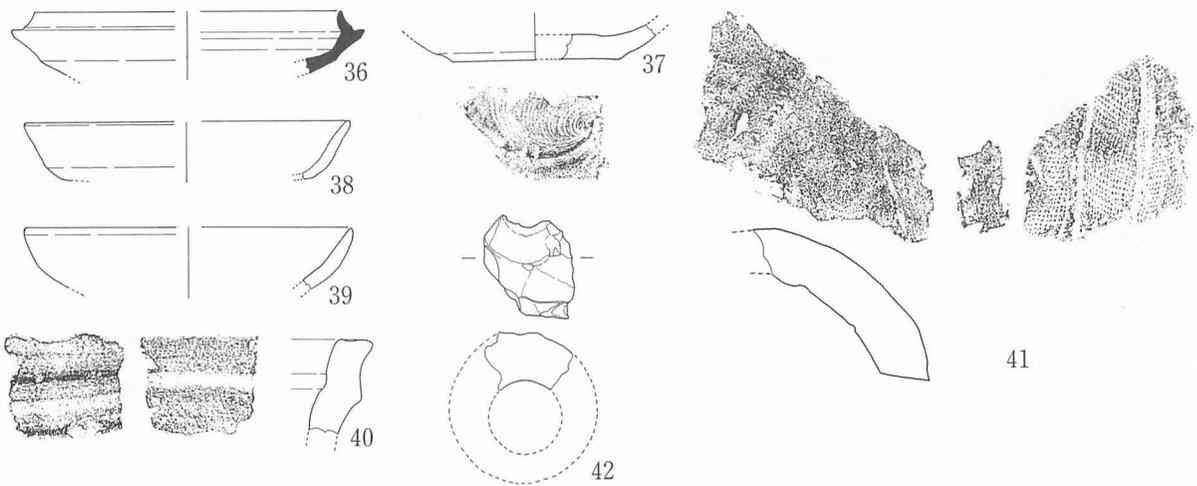
第18图 B区出土遺物1 (B区1号溝)



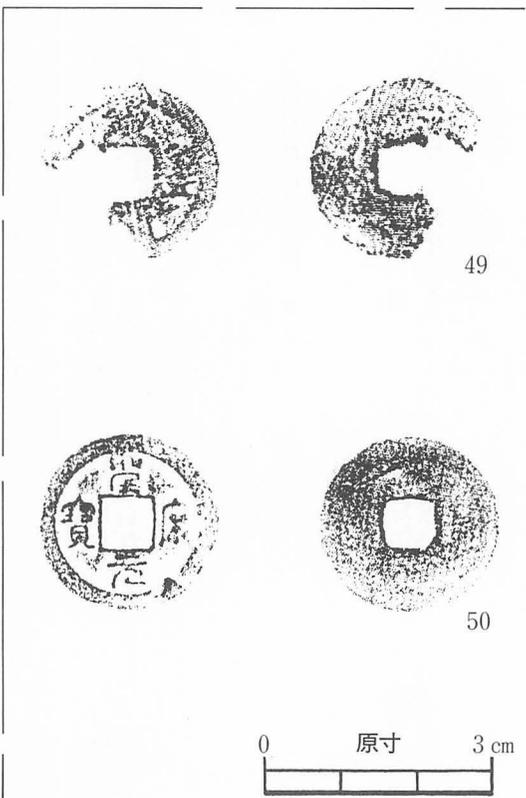
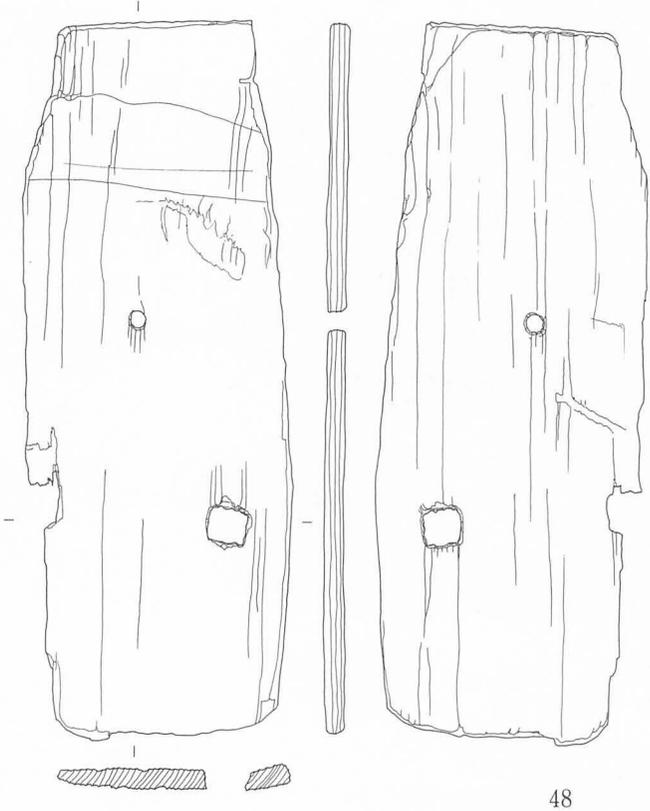
第19図 B区出土遺物2 (B区1号溝)



第20図 B区出土遺物3 (B区2号溝)

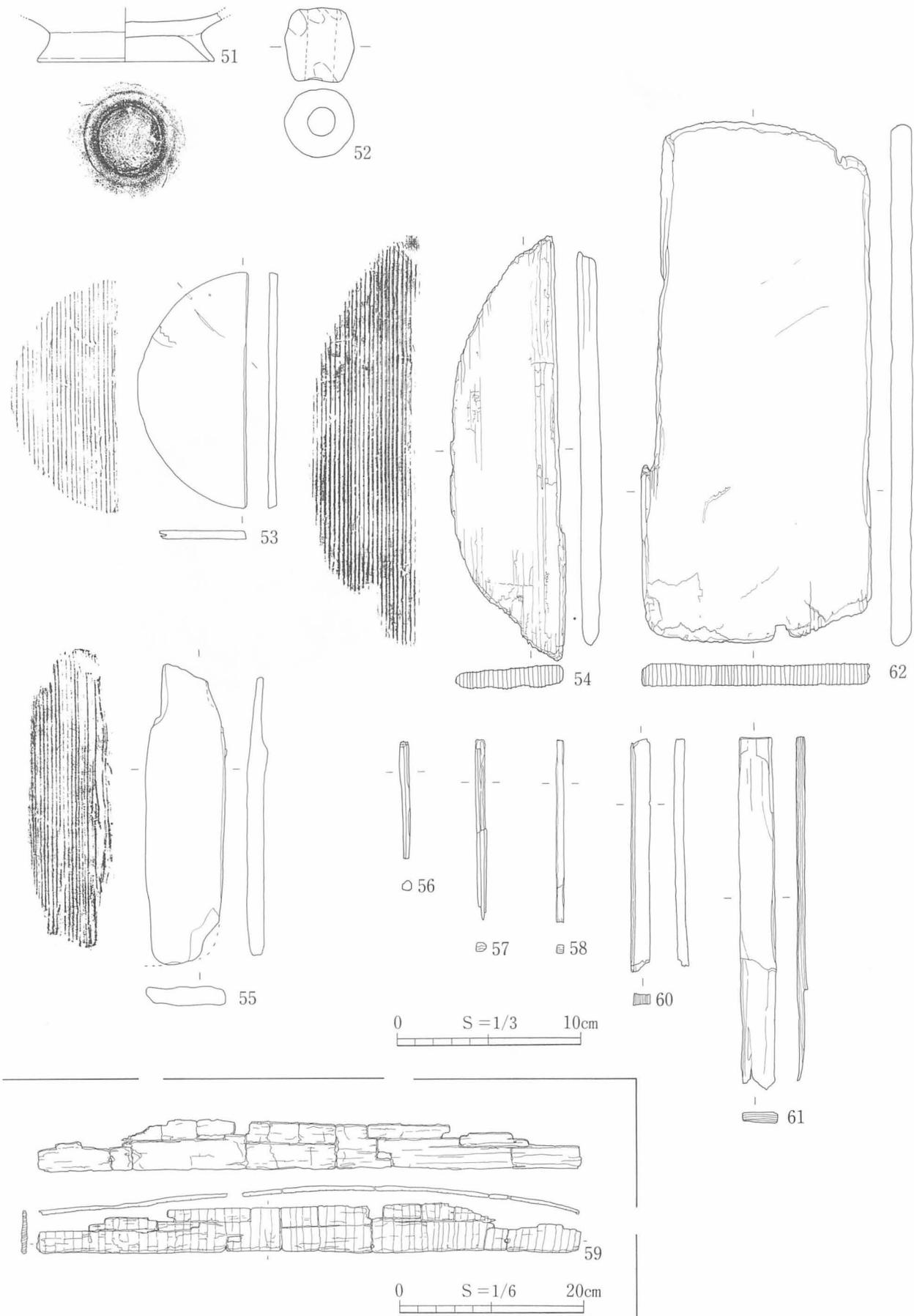


0 S=1/3 10cm

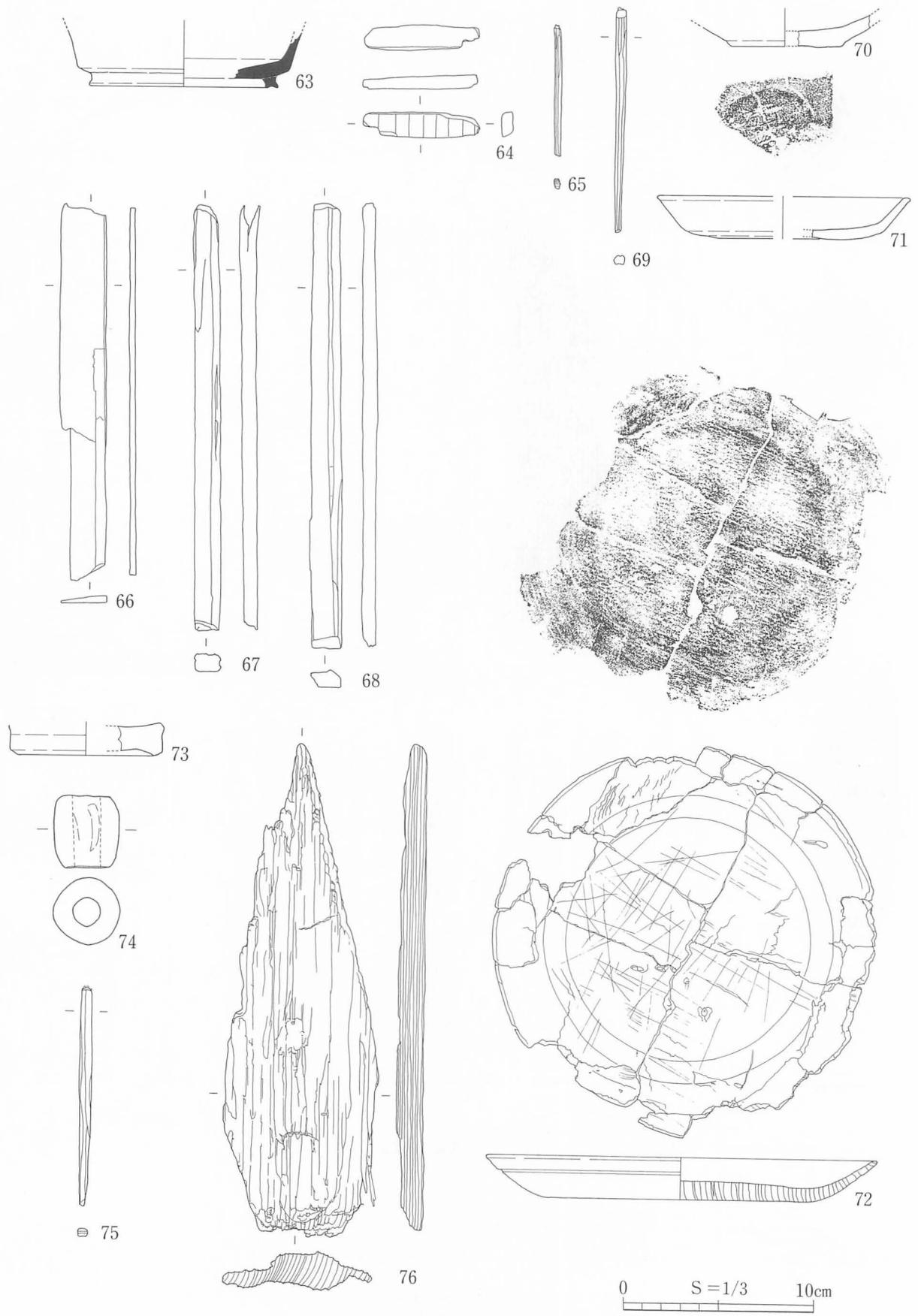


0 原寸 3cm

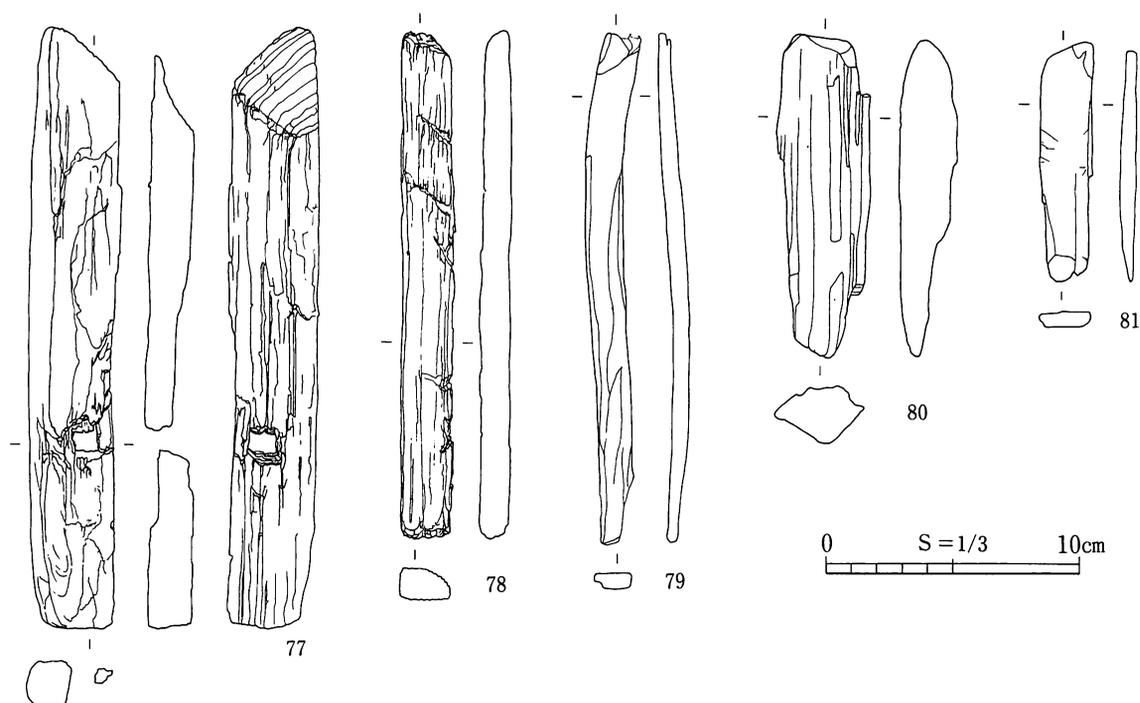
第21图 B区出土遗物4



第22図 B区東方試掘坑出土遺物1 (試掘坑No.1)



第23图 B区東方試掘坑出土遺物2



第24図 C区出土遺物1 (C区1号溝)

調は灰色を呈し、焼成は良い。38、39はともに中世土師器皿口縁部破片である。40は越前焼甕口縁部である。37はII層出土の土師器碗の底部である。底径は6.7cmを測り、底部には回転糸切り痕を残し、胎土には2mm程度の礫を含む。41はB-4区出土の丸瓦で、長さ9.5cm、幅6cm、厚さ2cmを測り、調整は表面がナデで、裏面には布目痕が残る。42は層位不明のフイゴ羽口で孔径は復元推定ではあるが2.9cmで、残存長3.5cm、厚さ1.9cmを測る。

木製品では、43が曲物の底板で、44は箸である。45は刀形木製品の刀身の刃部にあたり、ゆるやかな弧状につくり片刃のものである。木取りは板目である。46は方形をなし上端より下端に向かって細くなる形状を呈する。栓ないしは製品の脚部かもしれない。47はI層出土の板状を呈するものである。48は排土出土田下駄である。縦長の足板に3個の鼻緒孔(円形のもが前1孔、方形のもが後2孔)を穿っている。型式分類では①田辺常博氏⁽³⁾ではオオアシI(単純縦長)②秋山浩三氏⁽⁴⁾では栓なし型式の三孔縦型に相当するものと思われる。

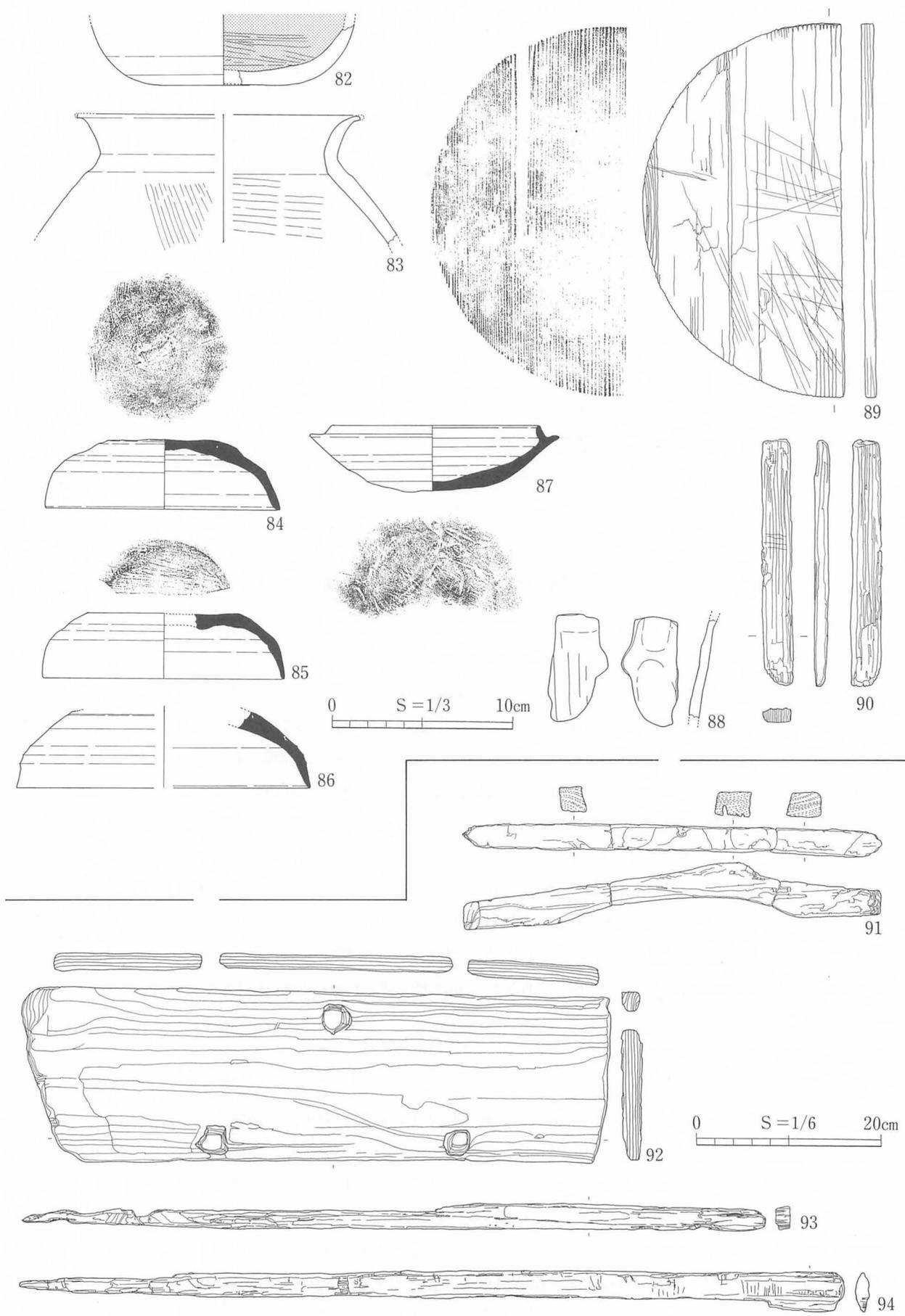
49・50はともに渡来銅銭で、49は判読不明であるが、50は北宋銭で初鑄が建中靖国元年(1101)の聖宋元寶(篆書体)である。

(2) B区東方試掘坑出土遺物

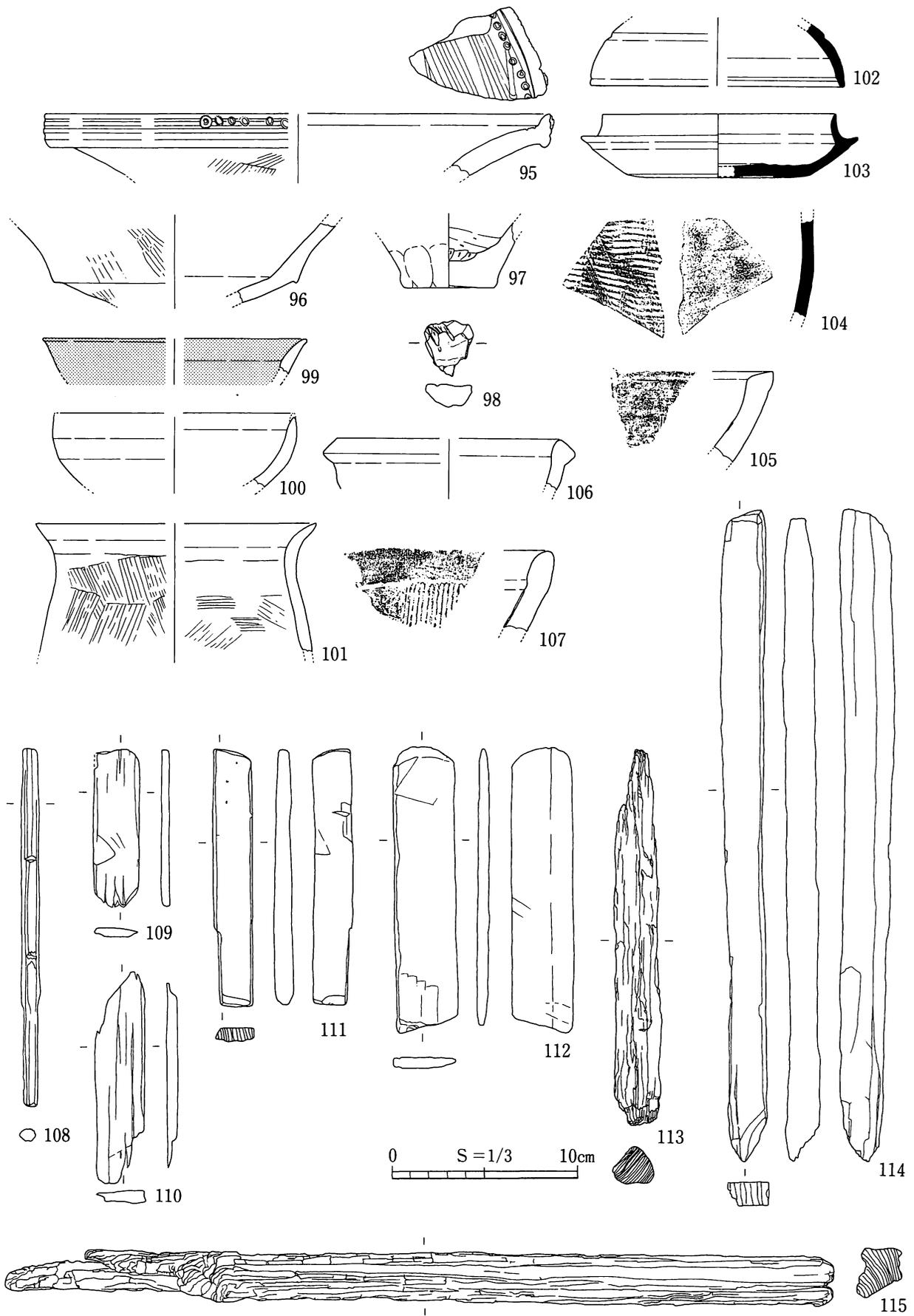
試掘坑No. 1

51～62までが出土しているが、52を除きすべて溝状遺構埋土18層濁緑灰色砂=III層よりの出土である。51は土師器碗で高台付のものである。台径9.7cm、底径8.2cmを測り、内外面ナデ調整で、底部には回転糸切り痕が認められる。色調は内外面とも灰黄色を呈し、胎土には2mm程度の礫を微量を含む。52は1ないし2層からの出土の土鍾である。土師質で長さ3.9cm、径3.8cm、孔径1.5cm、重量41.12gを測る。

木製品では、53～55が曲物の底板にあたると思われる。53は木釘痕が1箇所認められる。56・57は箸で幅、厚さとも約0.5cmを測る。58は厚さ0.4cm程度を測る薄板で、B区出土31と同形体とみられることから、曲物の側板と思われる。59も曲物側板であるが、樺綴の切目が1箇所、木釘による結合孔を2箇所認める。また、内面には



第25图 C区出土遗物2 (C区3号沟)



第26図 C区出土遺物3

側板の上下縁に対して縦平行線にほぼ等間隔のケビキが施されている。60～62は棒ないし板状をなすものである。

試掘坑No. 2

溝遺構埋土19層茶灰色砂質土＝III層の下面より出土した63は台径10cm、底径11.2cmを測る須恵器有台坏である。内外面ナデ調整で、色調は灰オリーブ色を呈し、焼成はあまい。64～68は19層上層から出土した木製品である。64は曲物側板で内面には縦平行線のケビキが認められる。65は箸で、66～68は加工痕を認める棒ないし板状を呈するものである。

試掘坑No. 3

遺物はIII層（19・20層）より出土した69の箸のみである。

試掘坑No. 4

層位不明の70・71が出土している。70は土師器碗底部と思われる。色調は浅黄褐色を呈し、胎土には1～2mm程度の礫を含む。71は土師器皿で色調は浅黄褐色を呈し、胎土には1mm程度の礫を含み、焼ムラがある。

試掘坑No. 5

溝遺構埋土III層（18層）より72の皿が出土している。柁目の挽物製で内面見込には19と同様に斜格子状の刃物痕が認められる。

試掘坑No. 7

73は17層（＝II層）出土の白磁碗底部で底径7.9cmを測り、内面は露胎、外面はナデ調整である。その他層位不明であるが74～76が出土した。74は土師質の土錘で、長さ3.8cm、径3.5cm、孔径1.5cm、重量33.7gを測る。75は箸で、76は加工痕を認める用途不明品である。

3 C区出土遺物（第24～26図）

1号溝

木製品77～81を認め、これらは溝埋土10層（＝III層）より出土した。77は方形をなし、長方形の柄穴と思われるものが、1箇所認められる。78～81は加工痕が認められる棒ないし板状を呈するものである。

3号溝

3号溝埋土14層（＝IV層）より82～94が出土した。82は内面黒色の土師器碗である。調整は内面はハケ目の後ミガキが施され、外面はナデである。色調は外面が灰黄色で、内面は黒褐色を呈し、胎土には2mm程度の礫を全体的に含む。83は土師器甕口頸部である。調整は口縁部がナデ、頸部以下はハケ目を施している。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には3mm程度の礫を含む。84～86は須恵器坏蓋である。84は器形はゆるい弧状を呈し、口縁部端部は丸みをもつ。底部ヘラ切り後ナデ調整が施されている。口径12.8cm、器高3.8cmを測り、色調は灰色で、焼成は並であるが外面には焼ムラがある。胎土には2mm程度の礫を微量に含む。85は平らな天井部を呈し、口縁端部の器厚は薄めである。天井部には荒いハケ状の調整痕が認められる。口径13.2cm、器高3.6cmを測り、色調は灰色をなし、焼成は並である。86は口縁部破片で、色調は灰白色をなし、焼成はあまく、胎土には1mm程度の礫を微量に含む。87は須恵器坏身である。口縁部は内傾し端部は丸みをもち、受部は短く、割合浅い器形を呈する。口径13.8cm、器高3.7cmを測る。色調は灰褐色をなし、焼成はややあまく、焼ムラがある。88は器厚は薄く橙色を呈し、二次焼成を受けている。調整は内面が指オサエで、外面はヘラナデの後ハケ目が認められる。器種としては尖底タイプの製塩土器の可能性が考えられる。

木製品では89～94が出土している。89は直径20.6cm、厚さ0.6cmを測る曲物底板である。内面には刃物痕が認められる。91は部材中央に抉りを入れその側面形が円弧状を呈することから、容器類の把手と想定される。その他は板状のものだが、92は長方形をなし、孔穴を3個認める。用途は不明である。

包含層出土遺物

弥生土器・土師器・須恵器・陶器・木製品が出土している。

a. 弥生土器

95は有段口縁の壺である。調整は内面にはハケ目が施され、竹管状工具による刺突がみられ、外面には口縁部に擬凹線がめぐり、竹管状工具による刺突が施され、二重の円形浮文が付けられている。時期は弥生時代後期後半であろう。96は高坏の坏部にあたるもので、ヘラミガキ調整が施されている。97は甕壺類の底部である。底径4.9cmを測り、色調は灰白色を呈し、胎土には1mm程度の礫と海綿骨針が含まれている。焼成は並であるが、外面には焼ムラが認められる。98は弥生土器胎土の焼土塊である。

b. 土師器

99は碗の口縁部破片で、割合直線的にひらくものと思われる。内外面に黒色処理がなされている。100は丸みのある形状をなす碗で、色調はにぶい橙色を呈する。101は甕で外面はハケ目で、内面はナデ調整が施されている。胎土には2mm程度の礫を含む。

c. 須恵器

102は坏蓋で口縁端部は若干内傾する。色調は灰白色を呈し、焼成は良い。103は坏身で口縁部が若干内に反り気味で、器高は低いものである。口径14.7cm、器高3.8cmを測り、色調は灰色をなし、焼成は並で、胎土には3mm角程度の礫が微量混じる。

104は壺胴部にあたるものと思われ、色調は灰色をなし、調整は外面はタタキで内面にはスリケシが施されている。

d. 国産陶器

I層より出土している。105は珠洲焼のすり鉢口縁部である。色調は灰白色をなし、焼成はややあまく、胎土には2mm程度の礫を含む。おろし目数は3本まで確認され、幅は0.5cmである。106は珠洲焼の壺口縁部で、色調は灰色をなし、焼成は良い。107は越前焼のすり鉢である。色調は浅黄色をなし、焼成は並である。おろし目数は13本まで確認され幅は3.3cmである。15世紀中～後半のものと思われ、B区出土の40の甕も同時期のものである。

e. 木製品

108は2箇所刻み目のついた棒状製品で、刻み目間の長さは5cmである。109～112は厚さ0.5cm前後を測る板状を呈するものである。113～115は棒状を呈するもので、114は面取りがしっかりしている。

4 主要出土土器の時期について

- ・ 縄文時代 後期－縄文土器深鉢（1・2・3）
- ・ 弥生時代 前期－弥生土器壺（4・5）
後期後半－弥生土器高坏（6・96）、壺（95）
- ・ 古墳時代 5C後半－須恵器壺（104）
6C後半－須恵器坏蓋（102）、同身（36・103）
- ・ 古代 7C前後－須恵器坏蓋（84～86）、同身（87）、木製品（89～94他）＝C区3号溝
7C後半～8C－須恵器甕（7）
8C後半～9C－須恵器有台坏（63）
10C後半～11C前半－土師器碗（8～13）、木製品（扇16、皿18・19・72他）＝A区不明落ち込み
- ・ 中世 12C前～中頃－白磁碗（73）、土師器碗（17・70）
13C～14C－中世土師器皿（38・39）
14C後半～15C初頭－珠洲焼すり鉢（105）、同壺（106）
15C中～後半－越前焼甕（40）、同すり鉢（107）

5 出土木製品について

今回の調査では比較的良好な状態での木製品の出土がみられた。木製品の分類は基本的に奈良国立文化財研究所の『木器集成図録 近畿古代篇』⁽⁶⁾によっておこない、器種の判明しているものを第3表のようにまとめた。時代は古代前半（7世紀前後）と平安時代中期（10世紀後半～11世紀前半）の二時期であるが、大半は平安時代中期である。その中で特に顕著なものや若干ではあるが傾向の読めるものを取上げてみたい。

1. 扇（第17図16） 檜扇は奈文研分類⁽⁶⁾によると「中央から左右に向けて長さを減じる11枚ほどの骨を要と綴紐によって綴合せており、全開時には60度内外に開く」ものが一般的傾向を示すとされている。

型式分類ではA-I型式にあたるが、檜扇を考察した加藤真二氏の分類⁽⁷⁾ではA₂I類『骨が左右対称・要の穴が1つのもの』にあたる。

本調査区出土のものは、現存では6骨を認めるが、残存する木釘の状態よりあと2骨程度はあったことが窺われる。この場合の扇の開口度は約40度と推定される。この開口度は他の類例よりみると若干狭い感があるが、用途としては儀式的、儀礼の様相⁽⁸⁾を帯びたものであるため、本調査出土のものでも充分堪え得るものであると考えられることもできる。また、基部端より17.5cmのところ糸綴りによると思われる痕跡が認められるため檜扇とされるが、あるいは形状からみて紙扇（^{かほり}蝙蝠扇）としての可能性も考えられる。檜扇の骨材板は一般的に一枚の幅が広めで、厚さは薄く長さは均等ないしは末（端部）にいくにしたがって長さを減じていくが、紙扇はその幅が狭く、厚さもあり、長さは均等である。奈文研『木器集成図録』では紙扇の出土例として鳥羽離宮出土のものを1点掲載している。ただ時期が12～13世紀と下るためこれ以降の中世段階では割合多くの出土がみられ、傾向としては大体前述の様相を呈している。本調査区出土扇と比較した場合、その幅が狭いという様相は見られるが、現存からの推定にはなるが末にむかって長さを減じるという傾向は見られないようにも思われる。以上、檜扇と紙扇の二つの可能性について考えてみたが、現状では欠損部分もあり断定は難しい。とりあえずここでは扇として報告しておく。

石川県内での檜扇の出土例としては他に、金沢市磯部カンダ遺跡⁽⁹⁾、戸水C遺跡⁽¹⁰⁾、千木ヤシキダ遺跡⁽¹¹⁾からの3点が認められる。

①金沢市磯部カンダ遺跡 金沢平野の北部、浅野川右岸の金腐川に挟まれた微高地上に立地し、古墳時代前期と平安時代前期の複合遺跡である。「元慶五年十一月」銘の木簡や「大野」墨書土器他祭祀遺物も出土していることから、官人層の居宅あるいは官的施設の可能性がもたれている遺跡である。檜扇は平安時代前期（9世紀）の河川跡から出土し完形である。先端部は幅広で基部に向って幅が減っていくタイプである。長さ28cm、基部幅1.4cm、先端幅2.6cm、扇骨は10枚を数え、要穴は1穴である。加藤分類A₁I類。

②金沢市戸水C遺跡 金沢平野の北東域の末端部にあたり、大野川左岸に立地している。縄文時代から中世に至る大規模な複合遺跡である。特に内陸・海上・河川交通上の要所に位置し、「津」墨書須恵器の出土により、古代の津、港湾施設として可能性のある遺跡でもある。檜扇は5断片で9世紀末の横板井籠組井戸（SE1111）からの出土である。断片は基部付近のもので全様相は掴めないが、先端部幅広タイプと思われる。基部幅は2.3cm、基部から先端部途中の幅で1.75cm、厚さ0.3cm、要穴は1穴である。内1点の片面には解読不明の墨書痕跡がある。加藤分類A I類。

③金沢市千木ヤシキダ遺跡 金沢平野の北部の金腐川の右岸に立地し、平安時代を中心とする地方支配機構に属する在地官人層の居宅あるいは、国郡衙機構に付随する官的施設の可能性も考えられる遺跡である。檜扇は10世紀の横板井籠組井戸から扇骨1枚が出土している。形状は片側縁において2ヶ所に小さなV字形切込みを、柄部にて弧形の切込みを入れている。現存長20.4cm、幅1.15cm、要穴は1穴である。片面に推定10文字以上の墨書痕跡があることより、転用木簡か扇面径の可能性がもたれている。加藤分類A₁I類。

以上県内出土檜扇の概要であるが、県内で最古でかつ完形のものは金沢市磯部カンダ遺跡出土のもので、次の

で金沢市戸水C遺跡、金沢市千木ヤシキダ遺跡そして本調査区出土遺物となる。本遺跡を含め出土遺跡の傾向としては、公的関連施設あるいは有力集団の居宅等で一般集落という様相は薄いといえ、これは檜扇の使用形態を反映したものと推察される。但し、使用形態は当初は専ら宮中での儀式儀礼の様相の濃いものであったが、時代が下るにつれて平素での使用に移行していったようである⁽¹²⁾。

2. 皿 皿は白木地製が3点(18・19・72)出土しており、その内口径の判明するものは2点(19・72)で、口径は20cm程度を測る。北陸の木製品を考察した川畑誠氏⁽¹³⁾によると、口径は5法量の分布が認められ、21cm前後、23～24cmのものがピークをなすということから本遺跡出土資料も主体的なものであったことが知られる。また、木製皿は8世紀中葉以降には確実に存在し11世紀前半まで確認されるが、本調査区出土資料を除けば10世紀前半までに収まり、その主体は8世紀後半～9世紀中葉の公的性格の濃い遺跡を中心に見られるという。

3. 曲物 曲物は完形での出土は認められず、部位での出土のみで側板4点(31・58・59・64)、底板8(9)点(内、底径の判明しているもの7点)である。まずそのうち比較の様相がわかる底板についてみてみたい。

曲物の底板と判断した基準としては円形、楕円形ないし長方形等の平面形態をとり板状を呈するものであること、側板との止具の痕跡(木釘痕、樺皮結合痕等)がみとめられること等である。また、板の内外面の判断材料として底板の側辺が垂直ではなく若干の角度をなしていることによる。上(内)面から下(外)面に向かって若干の窄まりをもつことより、上からの荷重がかかっても堪え得るもので、底抜け防止の機能が考えられる⁽¹⁴⁾。

曲物の底板の直径12cm台	1点(53)
" 15～17cm台	4点(20・21・22・43)
" 20cmを超え	2(3)点(54・89)・(62)

以上のように出土点数の内、対象となるものは僅か7点なので、ピークというにはいささか問題があるかもしれないが、15～17cmを測るものがほぼ中心を占める。但し、20cmを超える物のうち1点(89)は、時代的には他のものより古く、古代前半(7世紀前後)と比定されるものである⁽¹⁵⁾。また、底板の内面あるいは外面において、二次的に刃傷痕が認められるもの(20・22・53・89)があるがこれは曲物底板として使用後、刃傷痕が残る使用をしたものと思われる。例を挙げるなら、俎としての使用が考えられよう⁽¹⁶⁾。尚、62も曲物底板の可能性がある。

次に、側板のなかで比較的残存のよい59であるが、これで確認されるものは側板の綴じ方では一列以上の樺皮綴じを推察させる孔穴を認め、また、その底部には木釘を打ちつけた二つを併用したものである。側板は縦平行線にほぼ等間隔のケビキが施されている。縦状ケビキのほか、技法としては斜めと格子状のものがあるが、本遺跡では確認されていない。

4. その他 棒状木製品としたもののうち、108は片面に刻み目が認められることから計量的使用も想定され、算木あるいは経木の可能性も考えられよう⁽¹⁷⁾。

以上、本遺跡出土木製品についてみてきたが、本遺跡の南方1号地点(第3図)標高2m前後で8世紀末～9世紀初頭の土坑が検出され、木製椀3点、漆塗り盤1点が出土している⁽¹⁸⁾。特に椀の2個体は内外面とも調整半ばの荒形で、この辺りが木製品の生産拠点として存在していたことを裏付けるものである。本遺跡の出土木製品の時期は主に平安時代中期になり、時代は遡るが寺家遺跡内において木製品の生産拠点が存在したことは注目されることである。

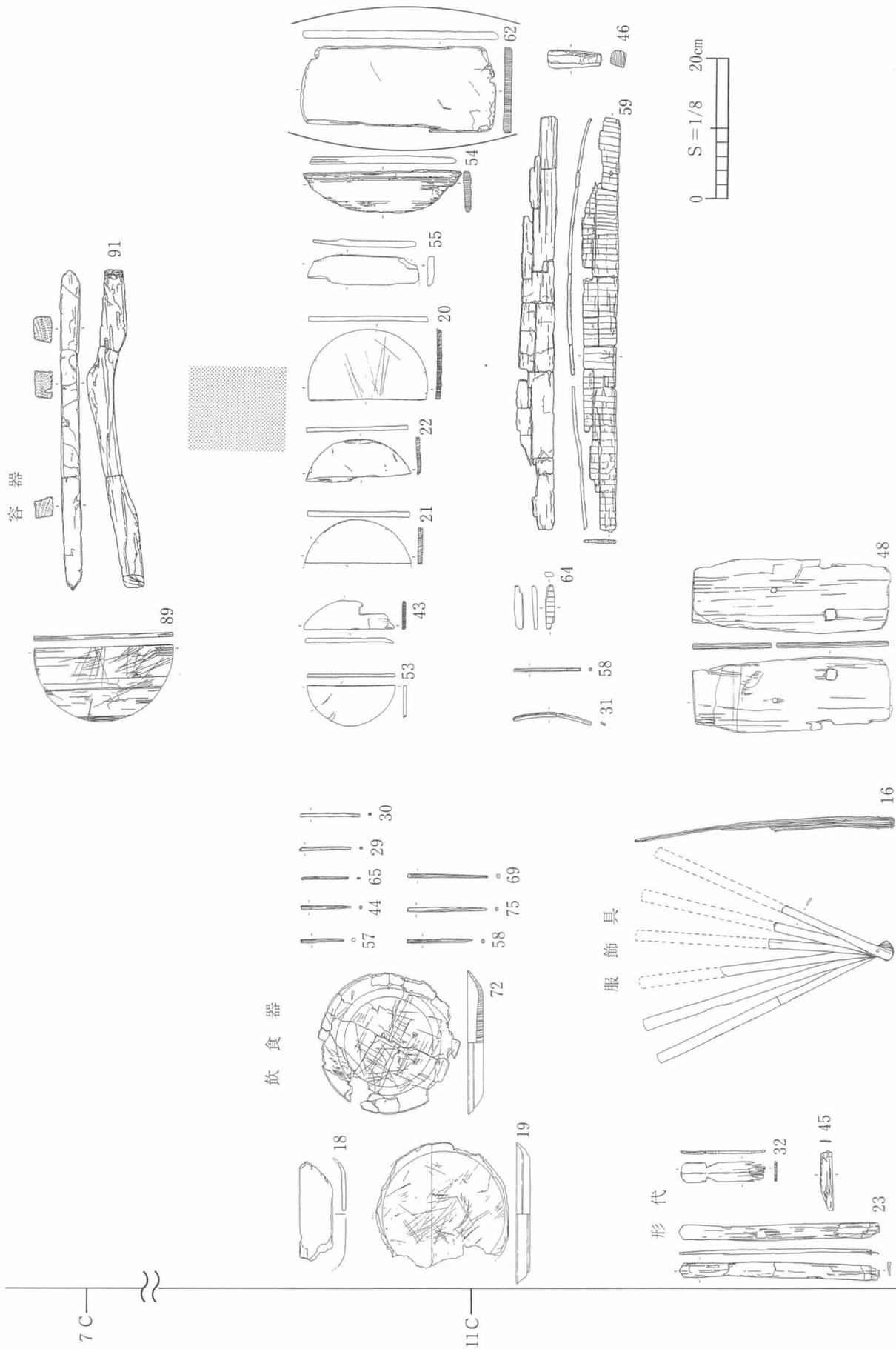
注

- (1) 仲田茂司「東国古代の挽物—食膳における土器との補完関係—」『考古学研究』第39巻第4号第156号考古学研究会 1993
- (2) 奈良国立文化財研究所の分類ではA I型式にあたる。下部は欠損のため不明。奈良国立文化財研究所編『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所史料第27冊 奈良国立文化財研究所 1985
- (3) 田辺常博「三方町内出土の木製農具(田下駄)について」『南前川遺跡』福井県三方郡三方町教育委員会 1985
- (4) 秋山浩三「大足の再検討」『考古学研究』第40巻第3号第159号考古学研究会 1993

- (5) 奈良国立文化財研究所編『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所史料第27冊 奈良国立文化財研究所 1985
- (6) A型式=中央から左右に向けて長さを減じる11枚ほどの骨を要と綴紐によって綴合せており、全開時には60度内外に開くもの。B型式全開時に円形となるもの。I式=要の孔が1孔のもの。II式=要の孔が2孔のもの。III式=要の孔は1孔だが、綴目をいれずに骨の末の両側にV字形切込みをいれて綴合せたもの。また、檜扇骨は11枚程が一般的とされるが、平城京二条大路溝状遺構(S D 5100・S D 5300)跡より8C前半の7枚組のものが出土している。毛利光俊彦他『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所 1995
- (7) 加藤氏は奈文研分類をもとにイ、骨の分類としてA類=骨の形が同じものでA 1類骨が左右非対称、A 2類骨が左右対称、B類=骨の形が異なるもの、ロ、骨の綴じ方の分類としてI類=要の穴が1つのもの、II類=要の穴が2つのものとする分類基準を設けている。加藤真二「檜扇考—奈良時代から平安時代初頭の檜扇について—」『考古学雑誌』西野元先生退官記念会 1996
- (8) 使用形態の一つとして笏の代用が挙げられる。但し、加藤氏(注7文献)は檜扇の起源を笏に求めることについては否定的である。
- (9) 金沢市教育委員会編『金沢市埋蔵文化財調査年報』平成7年度 金沢市教育委員会 1996
- (10) 大西 顕「調査速報 戸水C遺跡の発掘調査」『石川県立埋蔵文化財センター所報』第49号 石川県立埋蔵文化財センター1996尚、調査担当者大西氏の御厚意により実見している。
- (11) 出越茂和『千木ヤシキダ遺跡・II』金沢市教育委員会 1991
- (12) 平安時代以降では絵巻物や物語などによってその様相が知られる。扇の枚数も増し、婦人の使用等、かなり美装飾の様相が濃くなっている。
- (13) 川畑 誠「石川県内出土の木製食器・容器に関する覚書」『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会 1994、「北陸地方の木製食器の概要」『古代の木製食器』第1分冊 埋蔵文化財研究会・第39回埋蔵文化財研究会実行委員会 1996、「石川県の概要」同第II分冊 埋蔵文化財研究会・第39回埋蔵文化財研究会実行委員会 1996
- (14) 曲物底板としたものの内、側板との接合痕跡の不明なものが認められる(43・54・55・89)。いわゆる円形板と呼称されるものであるが、今回は資料数が少ないので一括して取扱った。
- (15) 川畑分類(川畑1994)によると石川県内の古代での最古資料にあたる。またこれによると7~8世紀初頭の出土例として、本遺跡と金沢市今町A遺跡、太田シタダ遺跡において認められる。口径は今町A遺跡では13cmで1点、太田シタダ遺跡では14~16cm台で2点出土している。但し、今町A遺跡の場合は形状からして、杓の可能性もたれている。
- (16) 組については三浦純夫氏の研究に詳しい。「宮保光明寺遺跡」『宮保遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター 1991、「まな板と包丁」『食生活と民具』雄山閣 1993
- (17) 金沢市三小牛ハバ遺跡より近似形態を呈する経木が出土している。参考として挙げておきたい。南 久和他『三小牛ハバ遺跡』金沢市教育委員会 1994
- (18) 谷内硯央『釜屋・新保・猫ノ目遺跡』羽咋市教育委員会 1982

参考・引用文献

- ・田嶋明人「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編 石川考古学研究会 北陸古代土器研究会 1988
- ・望月精司『二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡』石川県小松市教育委員会 1990
- ・吉岡康暢『中世須恵器の研究』吉川弘文館 1994
- ・『神奈川県・鎌倉市 佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地)発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団 1993
- ・『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・IV』大阪府教育委員会 1987
- ・飯塚武司「多摩ニュータウンNo.243・339遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 平成2年度』第4分冊 東京都埋蔵文化財センター 1992
- ・『日本の美術 第1号 装身具』至文堂 1966
- ・『日本の美術 第320号 扇画面(中世編)』至文堂 1993
- ・吉野裕子『扇 性と古代信仰』人文書院 1984



第3表 出土木製品分類表

第4表 出土木製品計測表

大分類	小分類	部位	点数	遺物番号	出土地点	容 量				
容 器	皿		3	18	B区 1号溝	不明 口径20cm・底径16cm・器高2cm 口径20.6cm・底径14cm・器高2.3cm				
				19	B区 1号溝					
				72	B区 東試5					
	曲物	側板		4	31	B区 2号溝	長さ12.5cm・幅0.3cm・厚さ0.6cm			
					58	B区 東試1覆土	長さ9.8cm・幅0.4cm・厚さ0.4cm			
					59	B区 東試1	長さ59.3cm・幅5.3cm・厚さ0.5cm			
					64	B区 東試2覆土	長さ6.3cm・幅1.3cm・厚さ0.6cm			
		底板		9	20	B区 1号溝	直径17.0cm・厚さ0.7cm・目釘有り			
					21	B区 1号溝	直径15.5cm・厚さ0.7cm・目釘有り			
	22				B区 1号溝	直径16.3cm・厚さ0.6cm・目釘有り				
43	B区 包含層				直径15.0cm・厚さ0.5cm・目釘不明					
53	B区 東試1				直径12.2cm・厚さ0.5cm・目釘有り					
把手			1	91	C区 3号溝	長さ45.5cm・幅3.9cm・厚さ2.8cm				
				46	B区 包含層	長さ8.9cm・幅2.5cm・厚さ2.3cm				
食事具	箸		8	29	B区 2号溝	長さ7.6cm・幅0.5cm・厚さ0.6cm				
				30	B区 2号溝	長さ8.7cm・幅0.4cm・厚さ0.4cm				
				44	B区 包含層	長さ8.3cm・幅0.5cm・厚さ0.4cm				
				56	B区 東試1	長さ6.3cm・幅0.5cm・厚さ0.5cm				
				57	B区 東試1	長さ9.8cm・幅0.5cm・厚さ0.5cm				
				65	B区 東試2	長さ7.0cm・幅0.4cm・厚さ0.6cm				
				69	B区 東試3	長さ12cm・幅0.6cm・厚さ0.5cm				
				75	B区 東試7	長さ11.6cm・幅0.6cm・厚さ0.4cm				
				服飾具	扇		1	16	A区不明落ち込み	長さ36.5cm・幅(先)1.7cm(基)1.4cm ・厚さ0.25cm・扇骨6枚・要穴1穴
祭祀具	斎串		1	23	B区 1号溝	長さ28.4cm・幅1.1cm・厚さ0.6cm				
				32	B区 2号溝	長さ13.1cm・幅2.9cm・厚さ0.3cm				
				45	B区 包含層	長さ8.8cm・幅1.7cm・厚さ0.2cm				
農 具	田下駄		1	48	B区 排土	長さ28.6cm・幅(上)7.7cm(下)8.9cm・ 厚さ0.8cm・緒孔間隔(横)7.8cm(縦)7.4cm				
用材・用途不明具	棒状		11	24	B区 1号溝	長さ24.9cm・幅1.6cm・厚さ1.2cm				
				25	B区 1号溝	長さ32.5cm・幅1.6cm・厚さ0.9cm				
				28	B区 1号溝	長さ11.5cm・幅2cm・厚さ0.9cm				
				60	B区 東試1	長さ12.2cm・幅1cm・厚さ0.5cm				
				67	B区 東試2	長さ22.5cm・幅1.3cm・厚さ0.9cm				
				68	B区 東試2	長さ23.5cm・幅1.5cm・厚さ0.7cm				
				78	C区 1号溝	長さ20.2cm・幅2cm・厚さ1.2cm				
				108	C区 包含層	長さ19.3cm・幅1.0cm・厚さ0.6cm				
				113	C区 包含層	長さ20.2cm・幅2.4cm・厚さ2.1cm				
				114	C区 包含層	長さ34.8cm・幅2cm・厚さ1.3cm				
				115	C区 包含層	長さ44.4cm・幅2.7cm・厚さ2.1cm				
				板状			18	26	B区 1号溝	長さ26.2cm・幅2.4cm・厚さ0.8cm
								27	B区 1号溝	長さ20.5cm・幅2.7cm・厚さ1.2cm
								33	B区 2号溝	長さ10.5cm・幅1.0cm・厚さ0.5cm
								34	B区 2号溝	長さ29.8cm・幅2.8cm・厚さ0.3cm
	35	B区 2号溝	長さ11.1cm・幅6.6cm・厚さ1.3cm							
	47	B区 1層	長さ9.5cm・幅4.2cm・厚さ1.5cm							
	61	B区 東試1	長さ18.6cm・幅1.9cm・厚さ0.5cm							
	62*2	B区 東試1	長さ28.1cm・幅12cm・厚さ1.0cm							
	66	B区 東試2	長さ19.8cm・幅2.4cm・厚さ0.3cm							
	79	C区 1号溝	長さ20.3cm・幅1.5cm・厚さ0.6cm							
	80	C区 1号溝	長さ12.7cm・幅3.5cm・厚さ2.3cm							
	81	C区 1号溝	長さ9.1cm・幅2.1cm・厚さ0.6cm							
	90	C区 3号溝	長さ13.5cm・幅1.6cm・厚さ0.8cm							
	93	C区 3号溝	長さ81.2cm・幅2.5cm・厚さ1.6cm							
	94	C区 3号溝	長さ90.1cm・幅4.4cm・厚さ1.6cm							
	用途不明			1	76	B区 東試7	長さ26.3cm・最大幅8.2cm・厚さ2cm			
77					C区 1号溝	長さ23.7cm・幅3.6cm・厚さ1.8cm				
92					C区 3号溝	長さ64.3cm・幅19cm・厚さ2cm				

・遺物番号のうちゴシック体のものは、7世紀前後の製品である。

・※1 本報告でも触れたが容器の栓の他、盤、槽等製品の脚の可能性も考えられる。

・※2 明言はできないが曲物底板の可能性も考えられる。

第5表 羽咋市寺家遺跡出土木製品の樹種

標本番号	樹種名	遺物番号	実測番号	製品の種類	木取り等	出土遺構
ISF-1695	スギ	16	1	扇骨(6枚羽)	細板 柱目	A-2 不明落込み
ISF-1696	スギ	20	2	曲物底板	柱目	B-1 1号溝
ISF-1697	スギ	21	3	曲物底板	柱目	B-1 1号溝
ISF-1698	スギ	22	4	曲物底板	柱目	B-1 1号溝
ISF-1699	ケヤキ	19	5	皿	柱目	B-1 1号溝
ISF-1700	ケヤキ	18	6	皿	柱目	B-1 1号溝
ISF-1701	スギ	23	7	齋串	薄板 板目	B-1 1号溝
ISF-1702	スギ	25	8	細棒	板目	B-1 1号溝
ISF-1703	スギ	28	9	細棒	柱目	B-1 1号溝
ISF-1704	スギ	26	10	板	板目	B-1 1号溝
ISF-1705	スギ	24	11	四角細棒		B-1 1号溝
ISF-1706	スギ	27	12	細板	柱目	B-1 1号溝
ISF-1707	ヒノキ	34	13	薄板	板目	B-3 2号溝
ISF-1708	スギ	32	14	人形	柱目	B-3 2号溝
ISF-1709	ヒノキ	31	15	曲物側板	板目	B-3 2号溝
ISF-1710	スギ	29	16	箸	削り出し	B-3 2号溝
ISF-1711	スギ	30	17	箸	削り出し	B-3 2号溝
ISF-1712	ヒノキ	33	18	細板	柱目	B-3 2号溝
ISF-1713	スギ	35	19	板	柱目	B-3 2号溝
ISF-1714	スギ	43	20	曲物底板	柱目	B-3 包含層
ISF-1715	クリ	46	21	栓		B-3 包含層
ISF-1716	スギ	44	22	箸	削り出し	B-3 包含層
ISF-1717	スギ	45	23	刀形	薄板 板目	B-3 包含層
ISF-1718	スギ	48	24	田下駄	柱目	B-1 排土
ISF-1719	スギ	47	25	厚板片	柱目	B-1 暗灰色砂
ISF-1720	スギ	53	26	曲物底板	柱目	B試掘坑No.1
ISF-1721	スギ	54	27	曲物底板	柱目	B試掘坑No.1
ISF-1722	スギ	62	28	曲物底板	柱目	B試掘坑No.1
ISF-1723	ヒノキ	59	29	曲物側板	板目	B試掘坑No.1
ISF-1724	スギ	58	30	曲物側板	板目	B試掘坑No.1・溝覆土
ISF-1725	スギ	57	31	箸	削り出し	B試掘坑No.1・溝覆土
ISF-1726	スギ	56	32	箸	削り出し	B試掘坑No.1・溝覆土
ISF-1727	スギ	61	33	細板	板目	B試掘坑No.1・溝覆土
ISF-1728	スギ	60	34	四角棒		B試掘坑No.1・溝覆土
ISF-1729	スギ	55	35	曲物底板	柱目	B試掘坑No.1・包含層
ISF-1730	スギ	68	36	細棒		B試掘坑No.2・(包)覆土
ISF-1731	スギ	67	37	細棒		B試掘坑No.2・(包)覆土
ISF-1732	スギ	66	38	板	柱目	B試掘坑No.2・(包)覆土
ISF-1733	ヒノキ	64	39	曲物側板	斜目	B試掘坑No.2・(包)覆土
ISF-1734	スギ	65	40	箸	削り出し	B試掘坑No.2・(包)覆土
ISF-1735	スギ	69	41	箸	削り出し	B試掘坑No.3・包含層
ISF-1736	ケヤキ	72	42	皿	柱目	B試掘坑No.5
ISF-1737	スギ	75	43	箸	削り出し	B試掘坑No.7・耕土(包)
ISF-1738	スギ	76	44	矢板	柱目	B試掘坑No.7・耕土(包)
ISF-1739	スギ	110	45	板	板目	C-1 包含層
ISF-1740	スギ	113	46	棒		C-2 包含層
ISF-1741	スギ	78	47	細棒		C区 黒褐色1号溝含
ISF-1742	ヒノキ	81	48	板	板目	C区 黒褐色1号溝含
ISF-1743	スギ	80	49	木片		C区 黒褐色1号溝含
ISF-1744	スギ	77	50	木片		C区 黒褐色1号溝含
ISF-1745	ヒノキ	79	51	細板	板目	C区 黒褐色1号溝含
ISF-1746	スギ	108	52	細棒		C-3 黒褐色シルト
ISF-1747	ヒノキ	109	53	薄板	板目	C-3 黒褐色シルト
ISF-1748	スギ	92	54	板	ほぞ穴付板目	C-3 3号溝
ISF-1749	スギ	93	55	板	柱目	C-3 3号溝
ISF-1750	スギ	94	56	板	柱目	C-3 3号溝
ISF-1751	スギ	90	57	細板	柱目	C-3 3号溝
ISF-1752	スギ	89	58	曲物底板	柱目	C-3 3号溝
ISF-1753	ケヤキ	91	59	角材	削り出し	C-3 3号溝
ISF-1754	スギ	111	60	細板	柱目	C区
ISF-1755	スギ	112	61	薄板	しゃく?柱目	C区
ISF-1756	スギ	114	62	四角棒		C区
ISF-1757	ノリウツギ	116	63	自然木		C区
ISF-1758	ノリウツギ	117	64	自然木		C区
ISF-1759	スギ	115	65	棒		C区

第5章 ま と め

今回の調査区は羽咋砂丘微高地に立地する寺家遺跡本体の東方縁辺部にあたる。調査の結果、縄文時代、弥生時代、古代前半、平安時代・中世の各時期を確認しているが、主体をなすのは古代前半（7世紀前後）と平安時代（10世紀後半～11世紀前半）の2時期である。検出された遺構は溝状遺構・道状遺構・不明落ち込み・小穴等で、遺物は縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、中世土師器、国産陶器、木器、銅銭等が出土した。

寺家遺跡は古代気多大社の祭祀と深く関わりつつ集落を営んだ遺跡で、その様相は1978～80年に調査した小嶋芳孝氏が詳細に報告⁽¹⁾している。この報告に準拠しつつ周辺遺跡の動向と合わせて本調査区の位置付けをおこないたい。（第2・3図参照）

寺家遺跡本体が始動するのは7世紀に入ってからであるが、この時期は竪穴住居跡が2・3棟程度のまとまりをもつ集落形成であった。また、北方の標高10～16mの台地上にはこれより先6世紀代より集落形成が開始される柳田シャコデ遺跡が位置する。但し、本格的活動は7世紀に入ってからでその末頃には計画的配置の大型掘立柱建物群が確認されている。この時期の寺家遺跡と比較した場合、大型掘立柱建物群が形成されていることよりシャコデ遺跡の方が優位性があり、滝岬と邑知潟北西部の低地や砂丘を拠点とする地域首長層の居住域であった可能性を示唆している⁽²⁾。本調査区も同様にこの時期の遺構・遺物を確認し、北西－南西方向に走るC区3号溝1条を検出し、須恵器・木製品等を出土している。

8世紀以降、本体では30棟程度の竪穴式建物群がより動出し、後半には掘立柱建物群に移行し、北西区域（祭祀地区）では馬蹄形をした砂丘窪地において祭祀活動を活発にするなど、本格的活動をおこなっている。対照的にシャコデ遺跡の集落は衰退し、代って8世紀初頭にはシャコデ廃寺が成立したと推定されている。羽咋郡⁽³⁾の郡領層を構成したとみられる羽咋君の氏寺とみられ、のち気多神宮寺へと転化していく。

9世紀に至り、大型掘立柱建物を臨立させるなど規模を拡大し、古代気多神社の祭祀の色彩を濃厚に持つようになっていくが、9世紀末ないし10世紀初頭間に生じた飛砂現象によって、寺家遺跡の南過半が砂丘に埋没してしまう。しかし、その影響を免れた地域では、土塁と堀で区画した郭に館群が建てられている様相が知られる。

本調査区は土層観察の結果、この飛砂影響が薄く、10世紀後半～11世紀前半ではA調査区にて掘立柱建物も想定される他、B調査区において、東西方向に走る（東側延長約60mは確認）心心間距離約6.5mの両側側溝の道状遺構を検出している。また、この道状遺構側溝とC区1・2・4号溝およびA区不明落ち込み状遺構において、良好な木製品を出土している。これに関して時期は9世紀と古くはなるが、本調査区より約1km南方の1号地点（釜屋・新保・猫の目遺跡）から椀の荒形が出土したことにより木製品生産拠点が存在した可能性を指摘できる。

次に、検出された道状遺構について、羽咋周辺の交通体系とからめて多少触れてみたい。

古代北陸道は加賀から横山駅（河北郡宇ノ気町横山か）に至り、そこを分岐点として越中・能登へ通ずる。能登へは現在の羽咋郡押水町今浜辺りから次第に宝達丘陵裾沿いに北進し、撰才駅、越蘇駅を経て、能登国府（七尾市上古府・下古府辺り）に至るルートが官道として機能していた⁽⁴⁾。また、天平20年（748）越中国羽咋郡の時、国司大伴家持が出挙督励のため巡行した際、之乎路を越え羽咋に入り郡家を経て気多神社を参拝する⁽⁵⁾など、有力官社として地位を誇っていた気多神社・郡家へ通ずる道も整備されていたであろう。

中世の能登街道は現在の押水町今浜を境として、邑知潟を挟んで東側の東往来（内浦街道）と西側の西往来とに分岐して能登府中に至るルートがあったが、古代官道をほぼ踏襲する前者の東往来の方が幹線道としての役割を担っていたようである⁽⁶⁾。聖護院門跡の道興准后が文明18年（1486）から約1年間かけて北陸・東国・みちのくを巡る回国修業の旅を綴った紀行文『廻国雑記』の中に、東往来の巡行地として、羽咋郡志雄町菅原・杉野屋、鹿島郡鹿島町四柳・小金森・藤井・久江・石動山が記されている。

また、水上交通の面では湊（津）の存在が目される。古代羽咋郡の郡津の所在については不明であるが、その郡家を含めて中世史料により推測ができる。まず、鎌倉時代前期の承久3年（1221）に作製された「能登国田数目録」⁽⁷⁾により、旧郡家と郡津を踏襲したと思われる羽咋正院と湊保が初見される。羽咋正院については明確な

史料はないものの大体近世の羽咋村現羽咋市街地と周辺部に比定されている⁽⁶⁾。湊の存在を窺わせる湊保は建武5年(1338)史料⁽⁹⁾に「能登国湊保南方兵庫村」、貞和3年(1347)史料⁽¹⁰⁾に「能登国羽咋湊保吉崎」と見え、邑知瀧南岸から子浦川・長者川下流域にあたる、現在の羽咋市の市街地周辺部(兵庫・吉崎町付近)に比定される。特に東四柳史明氏⁽¹¹⁾は、この羽咋湊は潮の干潮を利用して、船が羽咋川を辿って邑知瀧に入り、さらにはその奥岸の鹿島郡金丸保や大町保付近にまで進んでいったものと推定している⁽¹²⁾。そこから瀧淵の大町道や瀧へ流れ込む邑知地溝帯の長曾川や久江川を遡って幹線道の東往來に至り、陸路を経由して国衙のある能登府中に、物資が輸送されていたと考察されている。以上の様相からすると、本調査区にて確認された道状遺構は東方向の邑知瀧に向かっていっており、瀧淵から1km程度の距離をみれば、この道を利用し瀧淵の船着場から水運を利用して、官道を通り能登国府へ至ったとも想定できる。但し、機能的には枝道(集落道)的なものであったであろう。

以降14世紀末に起きた大規模な飛砂現象によって寺家遺跡は埋没し、その活動は途絶えるが、気多神社東側の海成段丘上では遺跡数が多くなり、気多神社僧坊等の造営活動が本格化していく。

以上、簡単ではあるが今年度の調査成果のまとめとしたい。なお、本書を作成するにあたり次の方々に御教示、御指導を頂いた。記して感謝の意を表したい。

小嶋芳孝、垣内光次郎、北野博司、川畑 誠、安 英樹、柿田祐司 (敬称略、順不同)

注

- (1) 小嶋芳孝『寺家遺跡発掘調査報告Ⅰ・Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター 1986・1988
- (2) グロベヤマ、タンワリ1号窯の工人集団を擁する造窯活動と地理的条件から海浜生業一般とも深く関係する地域首長層と考えられている。河村好光『羽咋市柳田シャコデ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1984
- (3) 律令期の能登はその国域を越前国→能登国(養老2年718)→越中国(天平13年741)→能登国(天平勝宝9年757)と変遷しているが羽咋郡名は一貫しており、その郡域には流動はあると思われるが当地は羽咋郡に属していたことは確実であると思われる。また、その下の郷域は10世紀の様相を伝える『和名類聚抄』のうち、浅香年木氏の考察によれば吉田東伍氏が説く羽咋郡の神戸に属していた可能性を有力視されている。但し、その郷域についても流動的なものであったであろう。
浅香年木「古代の能登国気多神社とその縁起」『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター 1988
吉田東伍『増補大日本地名辞書』富山房 1971
- (4) 撰才駅の比定地としては羽咋郡押水町宿地内の他、撰才を「よき・よぎ」と読むとより、古代与木郷や余喜神社、余喜村に当てて、羽咋市大町・四柳付近に比定する説があり現在有力視されているが、三浦純夫氏は特に撰才駅の読み方の当否を含めて再検討を促している。また、越蘇駅については七尾市江曾町付近で所説一致している。小林健太郎『能登国』『古代日本の交通路Ⅱ』大明堂 1978。
三浦純夫「道の概要 古代」『能登街道Ⅰ』歴史の道調査報告書第2集 石川県教育委員会 1995
- (5) 『万葉集』17巻
- (6) 東四柳史明「道の概要 中世」『能登街道Ⅰ』歴史の道調査報告書第2集 石川県教育委員会 1995
- (7) 承久3年(1221)9月6日 「能登国四郡公田田数目録案」『加能史料 鎌倉Ⅰ』石川県 1992
- (8) 浅香年木「羽咋の古代」『羽咋市史』原始・古代編 羽咋市役所 1973、注3文献
- (9) 建武5年(1338)2月13日「平行兼寄進状」宝泉寺文書『加能史料 南北朝Ⅰ』石川県 1993
- (10) 貞和3年(1347)正月15日「無底良紹寄進状」永光寺文書『加能史料 南北朝Ⅰ』石川県 1993
- (11) 東四柳史明「日本海交通の拠点 能登」『内海を躍動する海の民』中世の風景を読む第6巻 新人物往来社 1995
- (12) 周辺の遺跡として、羽咋市大町所在の大町C遺跡があげられる。平安時代前期の集落遺跡であり、「大町」墨書土器の出土や官衙級遺跡で検出されている井戸と同程度の井戸1基が検出されている。(『石川県立埋蔵文化財センター所報』第36号 石川県立埋蔵文化財センター 1991)。また、羽咋市四柳町には四柳白山下遺跡が存在する。縄文時代中期～中世に至る複合遺跡で、特に奈良・平安時代では建物規模、規格性、豊富な遺物(墨書土器、円面硯、石帯、木沓等)内容からして、公的施設あるいは地域有力者の居住域の可能性をもつ遺跡である。(今井淳一『四柳白山下遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』羽咋市教育委員会1990・1991・1994、『社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報6』平成6年度 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会1995等)また、大町・四柳付近は前述のとおり古代撰才駅の比定地の一つとされているところでもある(注4参照)。

参考・引用文献

- ・高橋良雄『廻国雑記の研究』武蔵野書院 1987
- ・『中島町史』通史編 中島町役場 1996
- ・『石川県の地名』日本歴史地名大系第17巻 平凡社 1991
- ・『角川 日本地名大辞典17 石川県』角川書店 1981

付章 寺家遺跡昭和60(1985)年度発掘調査報告

本章は、石川県企業局(能登送水工事事務所)の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが実施した県水道用水供給事業に係る寺家遺跡の発掘調査記録である。

現地調査期間は、昭和60(1985)年6月3日(月)～同10日(月)、角鈴子・坂本文・竹沢ふさ子・寺岡美代紀・野島あさの(発掘作業員)、山本泰幹(調査補助員)の参加を得て、田嶋明人(専門員)・中島俊一(主査)・栃木英道(主事)(いずれも当時)が担当した。

県水道用水供給事業と埋蔵文化財の係わり全般については、別にまとめた〔栃木英道1995〕ので繰り返さないが、津幡町のポンプ場から能登島町の受水地点へ向かう送水管は、本遺跡付近では主として現道(主要地方道七尾羽咋線)下に推進工法(非開削)によって埋設されることとなり、遺跡に与える影響もさることながら、実際上調査可能な箇所は、二方向へ推進する際の発進立坑(本調査区、羽咋市柳田町71-1番地先)のみであった。調整の結果、鋼矢板締切から上部掘削、鉄骨補強、現道鉄板敷設等工事を先行させ、埋蔵文化財が所在する深度を確認(試掘)した後同深度まで掘削、工事を一時中断して発掘調査を行うこととなった。

調査区は凸形を呈し、現道脇(5.0×7.4m)と現道下(4.2×10.2m)をあわせて、面積約80m²(図化面積約65m²)を測る。中世以降かと推定される灰黄色砂質土(2層)、灰色砂質土(3層)、暗灰色砂質土(4層)の上部に盛土(1層)、下部に遺構埋土(5～25層)が堆積する。調査後仮BMが消失し海拔高が不明となったが、北から南へ傾斜(比高約50cm)する遺構面は、道路面(7m強)下3～4mを目安としておきたい。

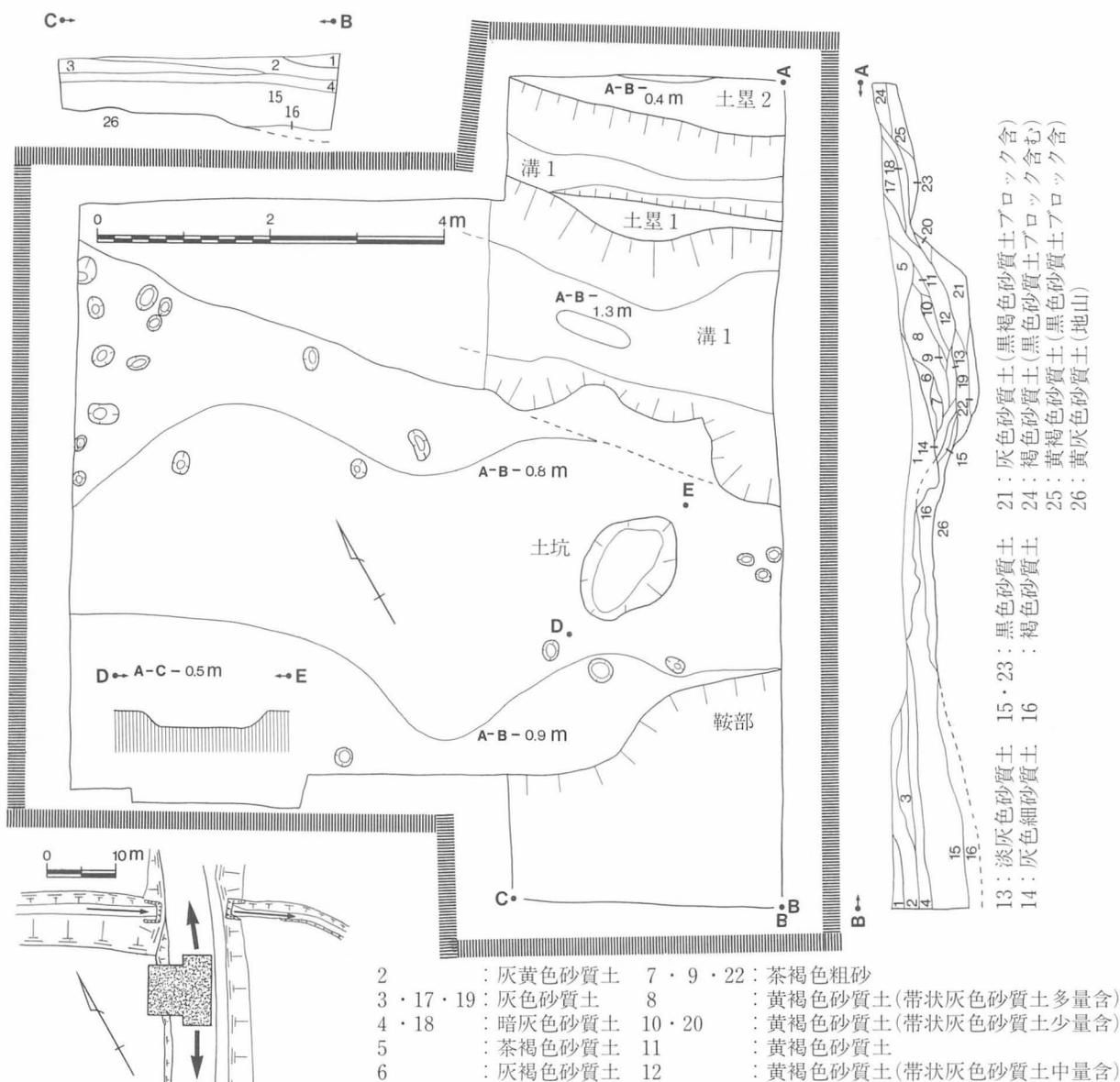
検出された遺構(工程及び排土の関係上、北及び南側隅の完掘を断念した)は、溝2、土塁2、土坑1、鞍部1、小穴21である。切り込み面が不分明で遺物の出土もない土坑(105×142×21cm)と小穴(深さ5～16cm)についての情報は少ないが、北東壁にみる溝、土塁の前後関係は、溝2(幅0.7m、23層)・土塁2(幅0.9m以上、溝2底からの残存高0.5m、24・25層)→溝1下部(幅2.6m、深さ0.8m、土塁流出?、19～22層)→溝1上部(幅2.6m、5～14層)・土塁1(幅1.8m以上、溝1上部底からの残存高1.0m、17・18層)の順を想定し得る。鞍部(幅2.8m以上、深さ1.0m以上)の埋土(15・16層)は、溝1下部上面にも一部堆積していることから、埋没時期は概ね溝1下部堆積後(同上部堆積前頃)と考えることができる。

出土遺物は、LII型コンテナバットにして1箱弱であり、ほぼ土器類で占められるが、ほとんどが細片で9点(P1～P9)を実測したにとどまる。P2・3(弥生土器高杯)は弥生時代後期後半頃(P1(弥生土器壺)も同様?)、P4～6(須恵器杯身)は7世紀第1四半期頃、P7(須恵器有台杯)は8世紀後半頃(P8(須恵器鉢)も同様?)、P9(龍泉窯青磁碗)は12世紀前半～13世紀前半頃の所産と考えられ、これまでの調査によって知られている本遺跡の存続期間を逸脱するものではない。このうち遺構出土遺物はP1・9で、ともに溝1からである。ここでは(細片ではあるが)P9を、どの段階であるかは特定できないものの溝1・土塁1(及び溝2・土塁2・鞍部)の所属時期に係わるものと考えておきたい。

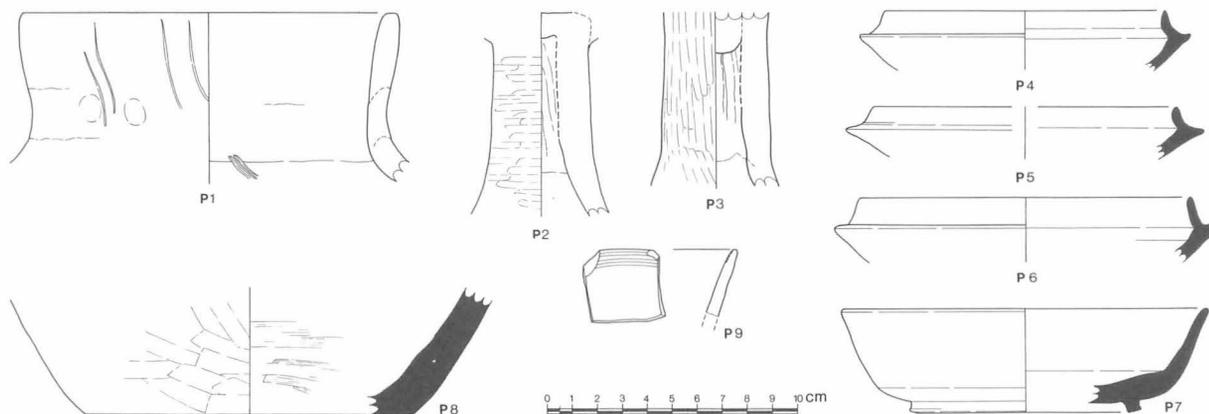
小嶋芳孝の段階設定(小嶋芳孝1988)によれば、本遺跡(砂田地区)に一辺50m前後の方形郭群が接続して造営されるステージ6(P4～6はステージ1、P7・8はステージ2あるいは3に属するものといえる)の年代観は、13世紀前半～14世紀前半である。本調査区で検出された溝・土塁(方向は概ねN40°W、2ないし3回の改変が想定される)も、それら方形郭群の一部である可能性が高く、当該ステージの広がりを考えるうえで貴重といえる。

栃木英道 1995 「発掘調査にいたる経緯」『谷内・杉谷遺跡群』 石川県立埋蔵文化財センター

小嶋芳孝 1988 「XXIX 寺家遺跡の画期」『寺家遺跡発掘調査報告』 II 石川県立埋蔵文化財センター



P 1	壺	口径15.0cm	橙色	外面記号文	P 6	杯身	口径13.0cm	灰色	小片
P 2	高杯	脚径 3.8cm	にぶい橙色	外面へら磨き	P 7	有台杯	口径14.4cm	灰色	口縁部小片
P 3	高杯	脚径 4.2cm	浅黄橙色	外面へら磨き			底径 8.2cm	器高 4.2cm	体部~底部1/4
P 4	杯身	口径11.0cm	灰色	小片	P 8	鉢	底径13.0cm	灰色	内外面削り
P 5	杯身	口径(12)cm	灰色	小片	P 9	碗	内面沈線3	素地灰色	釉灰オリープ色



第27図 昭和60年度調査区 (S=1/1,000)・遺構 (S=1/80)・遺物 (S=1/3)

報告書詳録

ふりがな	じけいせき							
書名	寺家遺跡							
副書名	県営ほ場整備事業羽咋西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	本田秀生 土屋宜雄 栃木英道 鈴木三男 西尾典子 能城修一							
編集機関	石川県立埋蔵文化センター							
所在地	〒921 石川県金沢市米泉4丁目133番地 TEL. 0762-43-7692							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯 。 / 〃	東経 。 / 〃	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
寺家遺跡	石川県羽咋市柳田町	17207	014	36度 54分 54秒	136度 46分 32秒	1994. 5. 6 、 1994. 5. 28	200㎡	県営ほ場整備事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
寺家遺跡	集落跡	古墳、平安	溝8条、柱穴など	須恵器、土師器、木製品		平安時代の扇が出土している		

図 版

A区表土除去作業(北から)

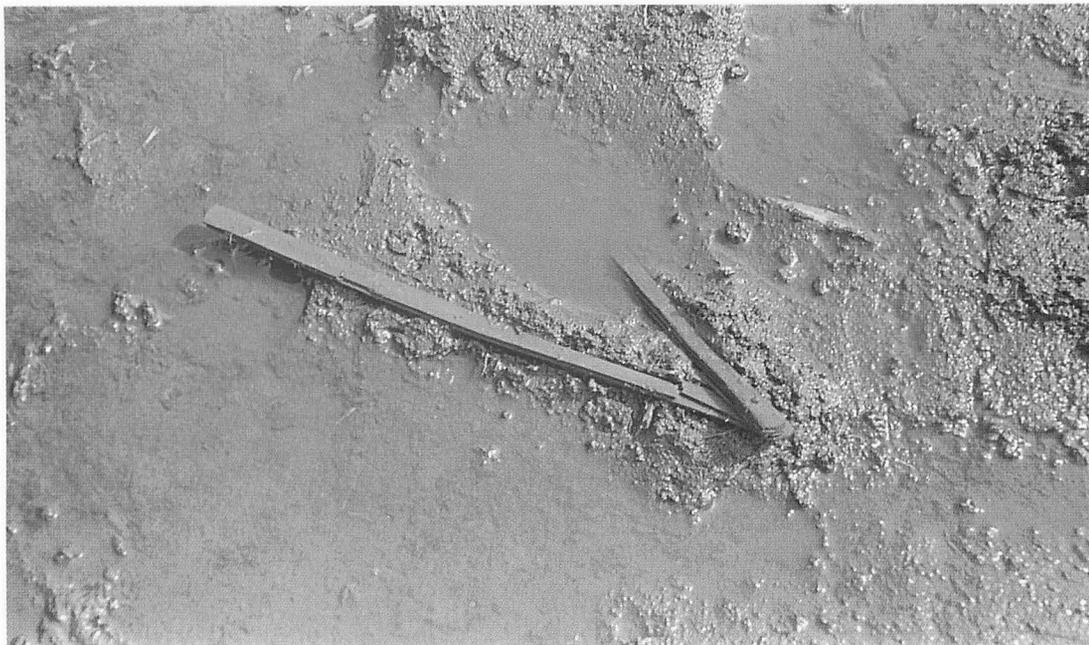


A区作業風景(東から)



A-2区不明落ち込み状遺構完掘状況(南から)





A-2区不明落ち込み扇出土状況(北西から)



A-3区完掘状況(西から)



A-3区より以南完掘状況

B区調査前風景（南から）



B-1区1号溝遺物出土状況（北から）



B-3区2号溝完掘状況（東から）





B-3区2号溝人形出土土状況(西から)



B区完掘状況(北から)



B-4区完掘状況(南から)

東方試掘坑 No.1 遺物出土状況 (東から)



東方試掘坑 No.2 遺物出土状況 (南東から)



東方試掘坑 No.3 完掘状況 (南から)

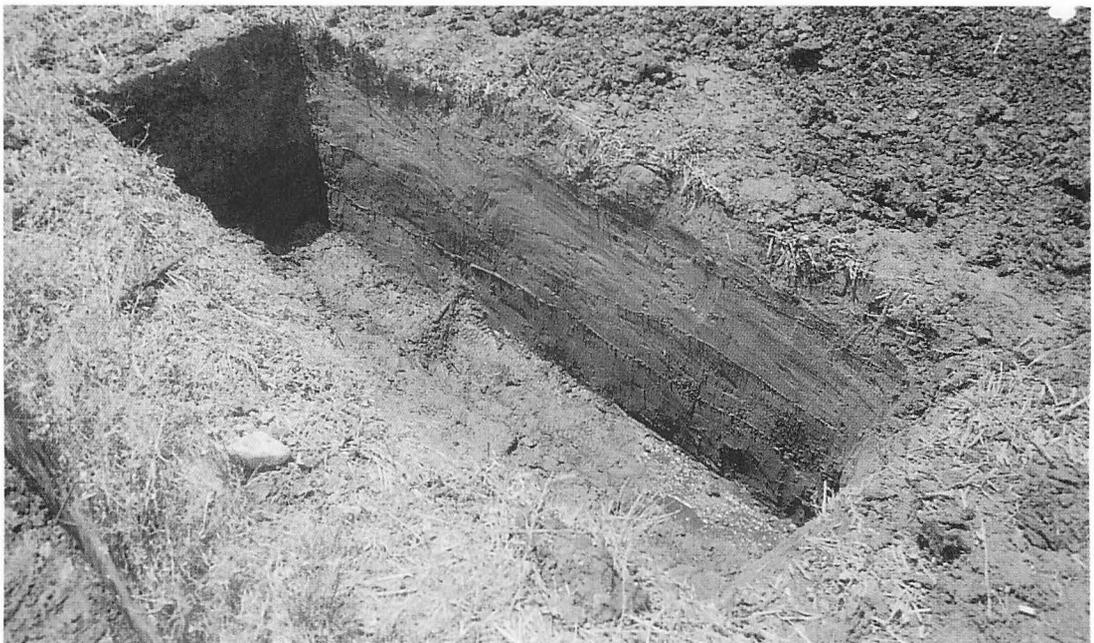




東方試掘坑No.4完掘状況(東から)



東方試掘坑No.5皿出土状況(南から)



東方試掘坑No.6完掘状況(北東から)

C区表土除去作業(北から)



C-3区1・2号溝完掘状況(東から)



C-1区畦状遺構(東から)





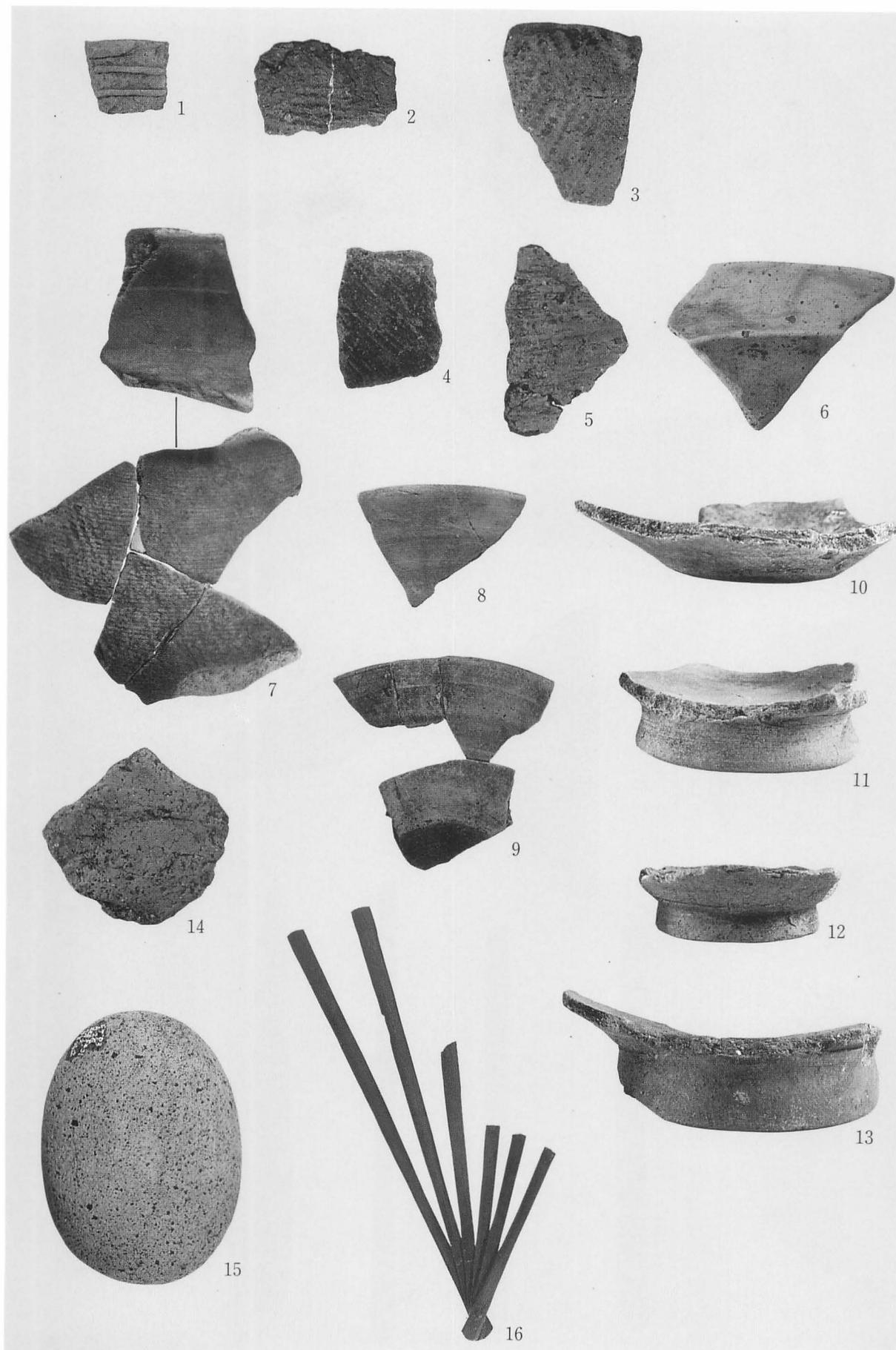
C-3区3号溝遺物出土状況(南から)



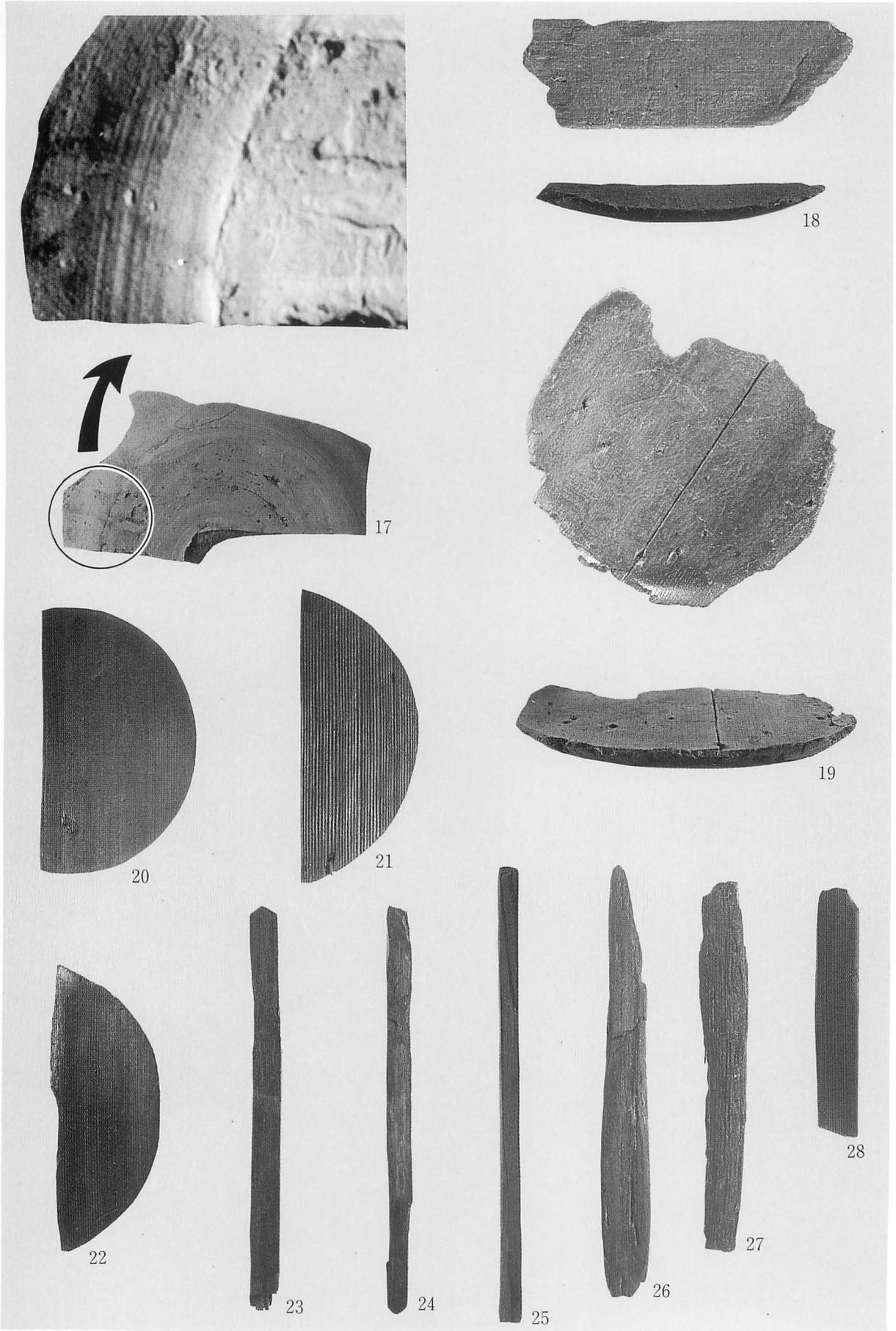
C-3区3号溝完掘状況(東から)



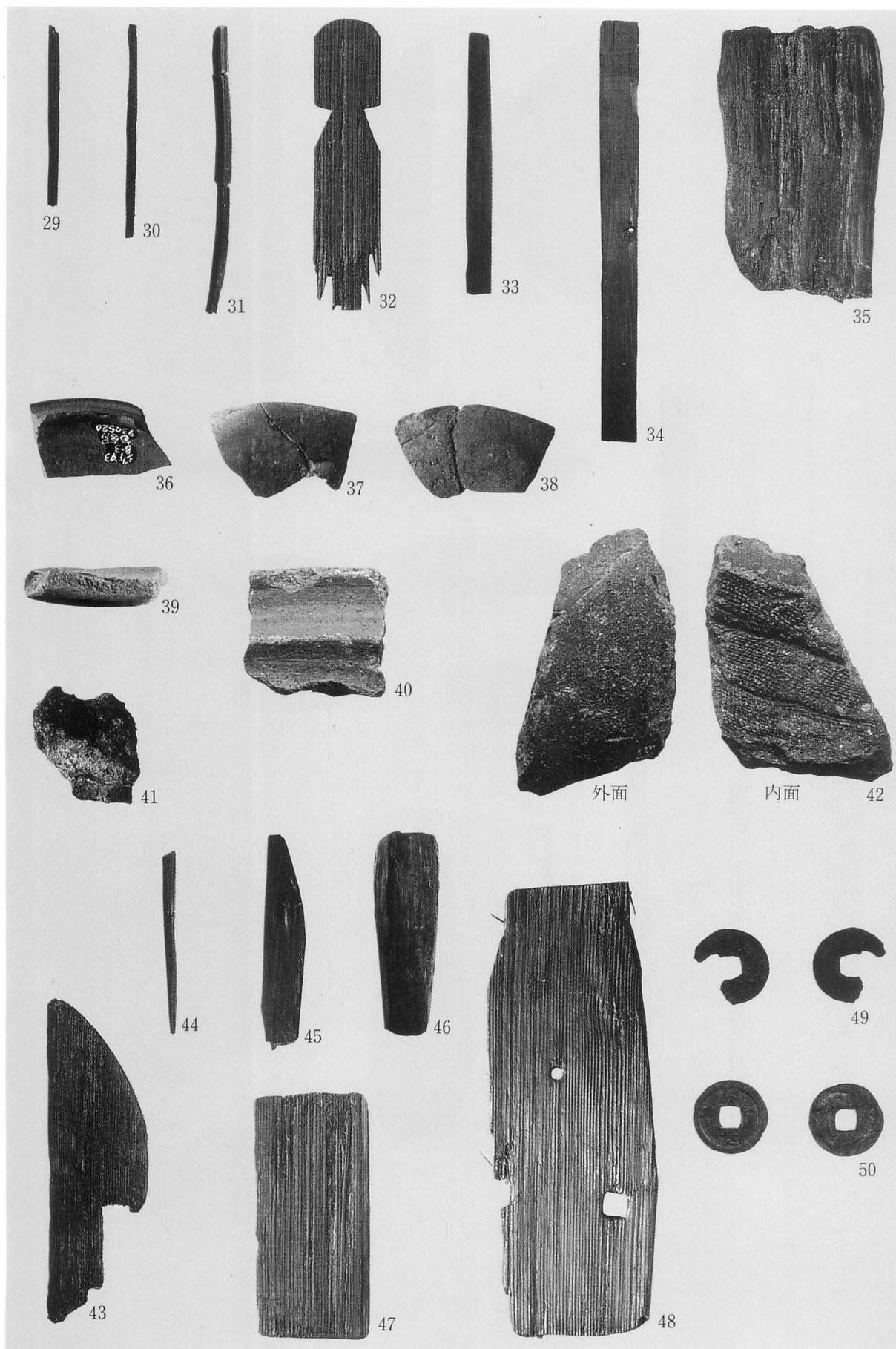
C区完掘状況(北から)



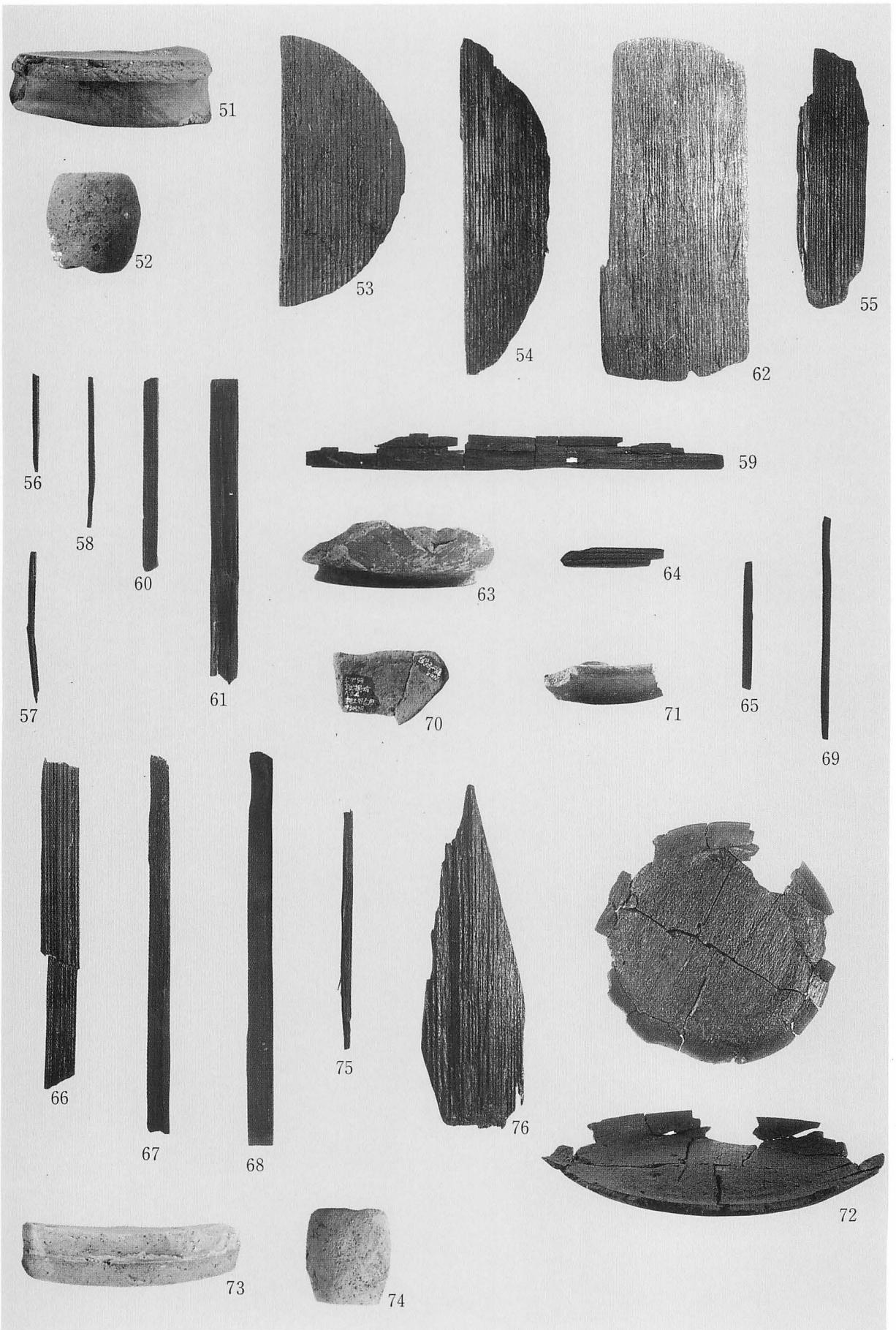
A区出土遗物



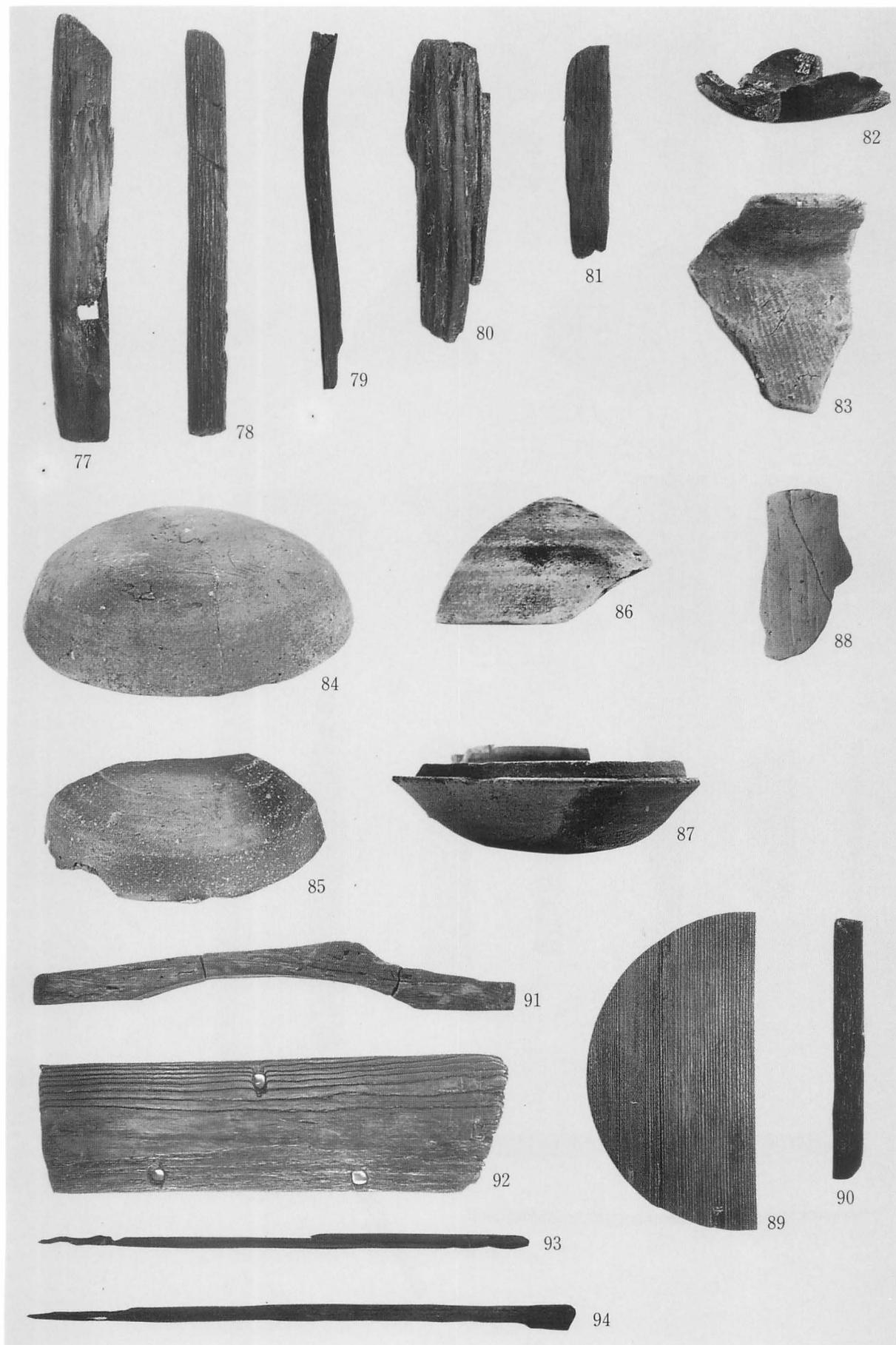
B区出土遗物1 (B区1号溝)



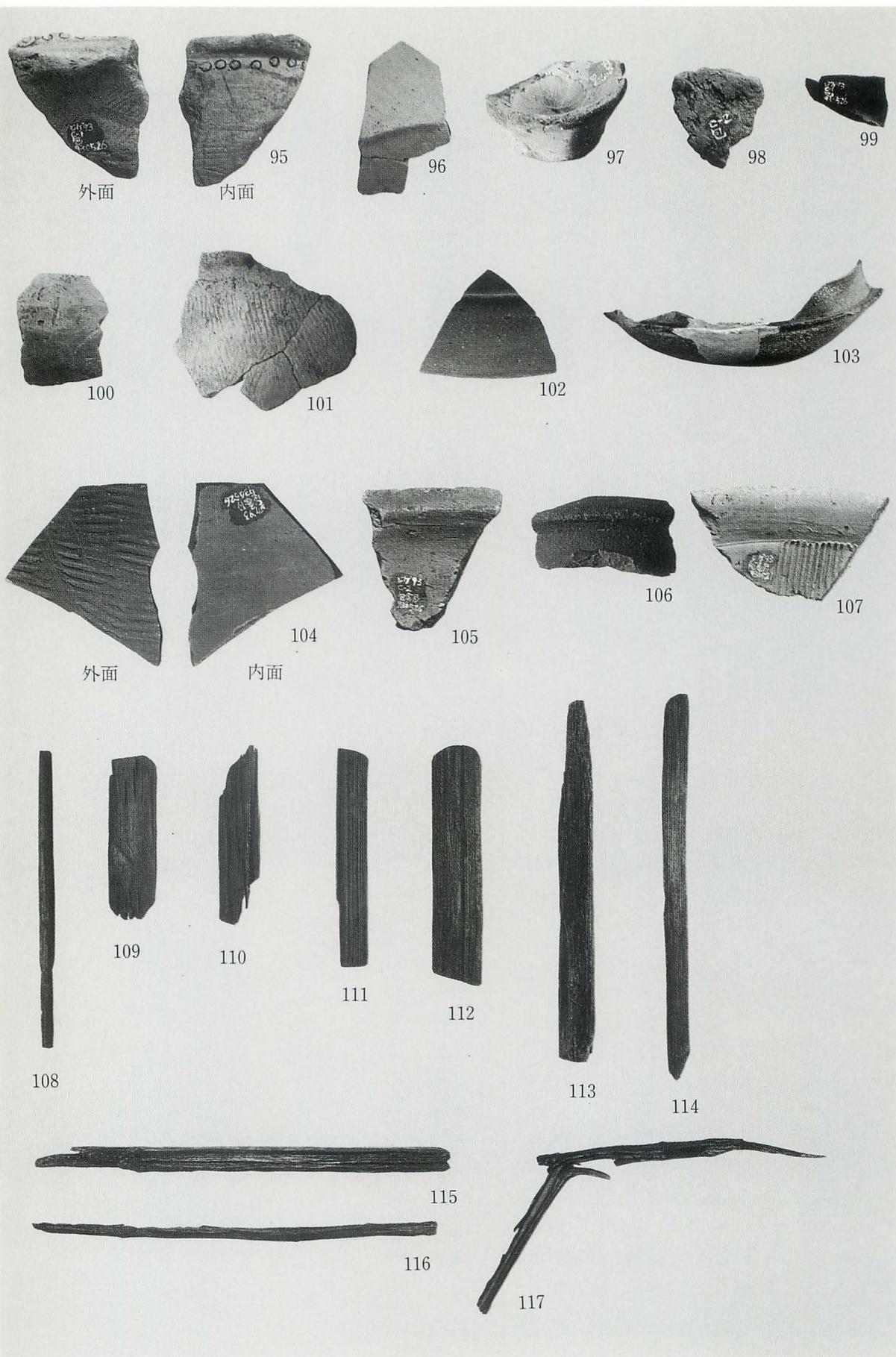
B区出土遺物2 (B区2号溝・その他)



B区東方試掘坑出土遺物



C区出土遗物1 (C区1·3号溝)



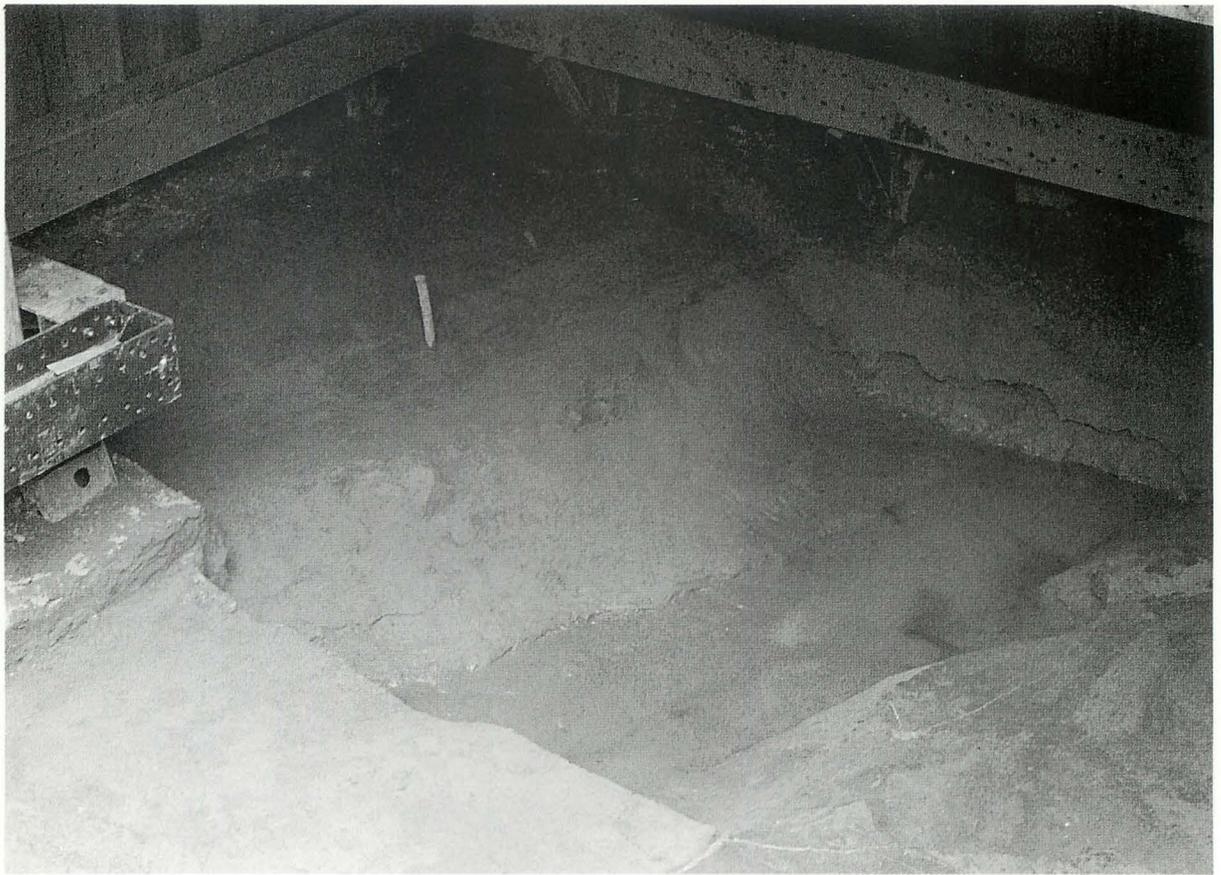
C区出土遺物 2



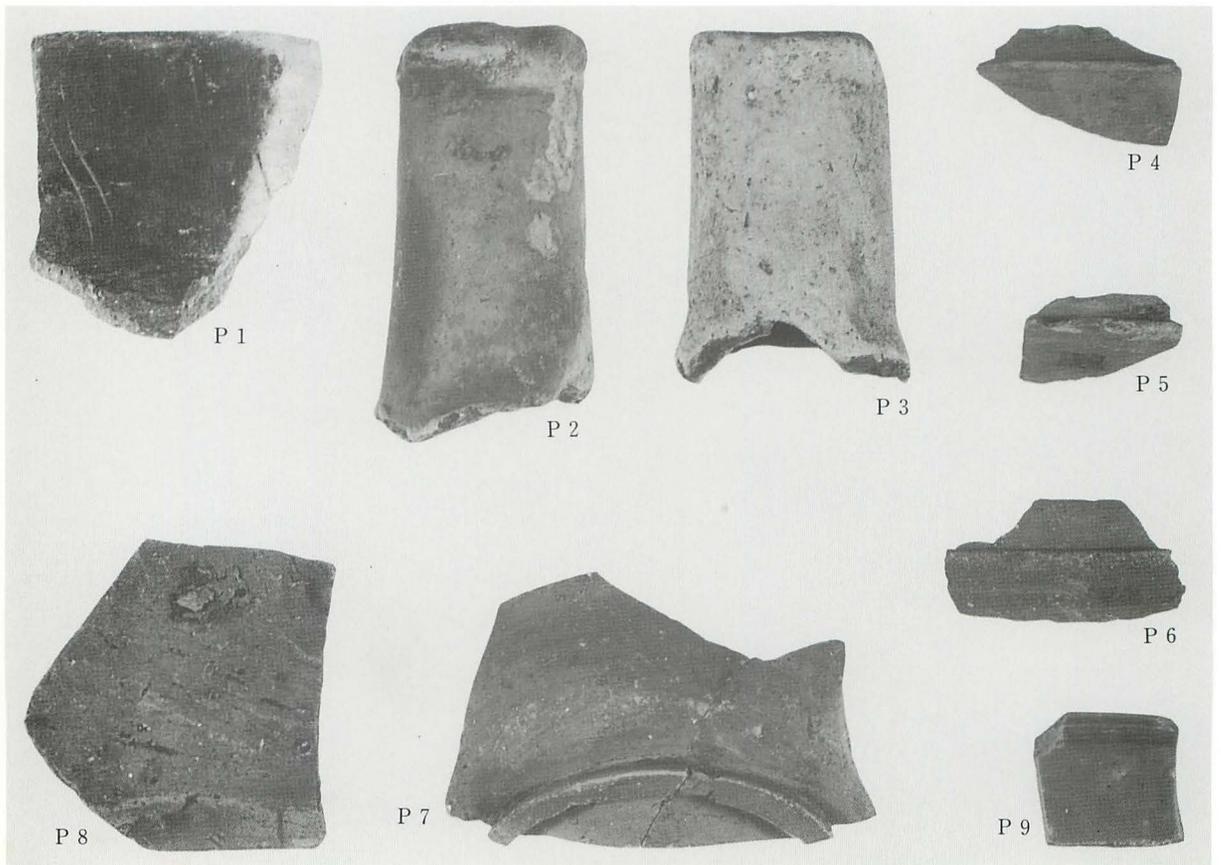
昭和60年度調査区（南西から）



昭和60年度調査区排水作業（東から）



昭和60年度調査区東側完掘状況（西から）



昭和60年度調査区出土遺物

寺家発掘調査報告書

発行日 平成9年3月31日

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
〒921 金沢市米泉4丁目133番地
TEL (0762) 43-7692

印刷 株式会社 橋本 確文堂
石川県金沢市増泉4-10-10
